

---

Quiz Magic Academy × **魔法先生ネギま ~時の魔神の復活~**

久露埜 陽影

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Quiz Magic Academy x 魔法先生ネギま  
〜時の魔神の復活〜

### 【Nコード】

N0905L

### 【作者名】

久露埜 陽影

### 【あらすじ】

qmaとネギま！のクロスオーバーです。  
一応、ギャグです。  
あと、シリアスです。

qmaの世界から、ネギまの世界へと送られた一同。  
さあ、ネギまの世界でどうやって生き残るのか!?

## プロローグ1 始まりの事件

注意！

- ・作者に小説の腕を期待しないでください。これが人生初の小説ですので…。
- ・作者はネギまの原作を持っていません。なのでミスがあった場合はこっそり教えてください。
- ・これは「ネギま」と「QMA」のクロスオーバーです。
- ・QMA側のキャラに出てくるのはDS2の皆さんです。

S I D E Q M A

無限迷宮

それは、かつてマジックアカデミーを、そして世界を脅かした存在、『時の魔神ラプラス』が潜んでいた謎の空間。  
何処を見渡しても、階段、階段、階段…。  
終わりのない、まさに無限に続く迷宮であった。

ケイオス「…どうして俺がここにいる？」

金髪の男性、ケイオスはそう呟いた。

ケイオスは本当に知らなかったのだ。ベッドに入り、眠っているはずだった。

これは夢か？そう思い始めたとき、ケイオスの目の前に、存在するはずのない「奴」が出現した。

ケイオス「なっ…!?!」

奴はその巨大な水晶のようなコアから光線を発射した。

???「お…のれ…。この私を…ここまで怒らせて…ただで済むと…思っな…。」

???「貴様らは…ここで…死ぬのだ!!」

目の前に光が迫ってくる。

ケイオスはとつさに防御魔法を張ったが間に合いそうもない。

その光がケイオスの体を貫き、ケイオスの視界は暗くなってゆく…。

???「これは…真に恐ろしいのは、セ…。」

奴は何かを呟き、そして消えていった。

side ケイオス

ケイオス「うわあああー!」

…朝から最悪な夢を見た。体が汗だくで、ベッドも汗で濡れている。

ケイオス「チツ…。なんて夢だ。」

俺は、苛立ちのあまり舌打ちした。シート、洗わなきゃ…。

しかし、なんだか妙に気になる。あれはただの夢。

だがしかしそれでは済ませられないような何か嫌な予感を感じる。

奴は…ラプラスは最後に何か言っていた。良くは聞き取れなかったが…。

ラプラス「これは。真に恐ろしいのは、セ」。

俺の嫌な予感、これまでも嫌なほど良く的中していた。

今回も、そうなのだろうか。

ケイオス「…気のせいであれば、嬉しいぜ」

誰に言うでもなく、俺は部屋を出た。

side out

side ネギま！

???「最強の魔法使いとやらからの挑戦状の指定場所は確かに此処なんだが…。」

…ここは魔法世界に存在する、ただの廃墟だろうか？  
ナギとやらは何を考えているのか…。

???「奴には奴なりの戦略があるのかも知れんな。」

ナギ「その通りだ！皆、今だ！」

???「ぐわっ！？これ…は…！？」

遺跡の裏から唐突に赤き翼の連中が姿を現す。

本当なら魔法ですぐに消す所だが俺の体に、何か拘束具のようなものが張り付き、魔法を邪魔する。

おのれ…この俺をこんなもので拘束できると思っただら…!

???「大間違いだああ!!」

パキイイイイインン!

ナギ「よし!これでリミッターがお前に付いたぜ!

???「なん…だと?全て破壊したはず…。」

ナギ「はっはっは!悪く思っなよ!幾ら俺でもお前を倒すことは出来ない!だったら、

お前を別の時空へ送り飛ばしてやる!」

俺の後ろに穴の様なものができ、俺を吸い込もうとする。

???「ぐああつ!!おのれナギ…!だが、浅はかだな!俺を別時空に送れば、その時空の住民達に  
危害が加わるぞ!貴様は自分の利己的な考えで、別時空の住民に危害を加えるのか!」

ナギ「…!」

ラカン「惑わされるな、ナギ!」

ナギ「…そのための、リミッターだろ?心配しないで別の時空に言っただけ!」

「????」おの…れ…！俺は必ず…貴様を…ぐああああ…！」

穴は完全に俺を飲み込み、そして消えた。

おのれナギ…！俺は必ず…貴様を…殺しに…戻って来る…ぞ…。  
そこで俺の意識は闇に沈んだ。

s i d e o u t

全く違う時空で起こった二つの事件…。

しかしこれは二つの世界を繋げる架け橋となる。

時の魔神と、別時空に送られた者によって…。

## プロローグ1 始まりの事件（後書き）

人生初の小説ですが、難しいですね。

次回は、ネギまではなくq m aの世界側のお話。

## プロローグ2 ここから始まる(前書き)

2話目です。

やや展開に無理があります。

早く本編に行きたいので。

## プロローグ2 ここから始まる

side qma

カイル「へえ、そんな夢を見たんですか…。」

今朝の夢が気になって仕方がないケイオスは、同じクラスのカイルに今朝の事を話していた。

カイル「気になるのは仕方ありませんが、時の魔神ラプラスの本体である『二つの時空石』が消滅したからには、復活するのはありえないと思いますが…?」

『二つの時空石』とは。

魔神ラプラスの本体が封じられている、

『来るべき時の時空石』と、

『過ぎ去りし時の時空石』の事である。

どちらも時間のエネルギーを司る石で、一同がラプラスを倒した際、消滅した。

ケイオス「ああ、それは分かってる。だが…

問題は奴が言っていた『セなんたら』の事だ。」

レオン「よっ！カイル。何の話をしてんだ？」

話をしていると、これまた同じクラスのレオンがやってきた。

カイル「ああ、レオン君。今ちょうど、

ケイオスさんが見た悪夢について話していたんです。」

レオン「悪夢？どんな？」

ケイオス「ああ、それは…。」

かくかくしかじか

レオン「はあ。なるほどな。でも、夢は夢だろ？  
くよくよしたって仕方ねえって！」

レオンはあっけらかんと答えた。そして

レオン「ま、どーせ見るならいい夢が見たいけどな！」

と付け足した。

能天気なレオンにカイルは苦笑していたが、ケイオスは、

ケイオス「なるほど…そうかもな。例を言っぜレオン。」

レオン「んあ？俺なんか礼を言われるような事言っただけ？」

ケイオス「ふっ…いや、なんでもない。気にするな。」

確かに、自分は考えすぎていたのかもしれない。

たとえ、ラプラスが復活したとしても、セラがいる限り大丈夫だろ  
うと考えた。

何故なら、彼の弟子セラは魔神の力を封じる『瞬間のくさび』をつ  
くれるのだから。

そんなことを考えていると、担任のサツキ先生が教室に入ってきた。

サツキ「はい、皆席についてね。

魔法のレポートが今日締め切りだけど、皆持ってきたかな？」

レオン「げっ!？」

サツキ「…(汗)その反応からすると、レオン君、忘れたのね？  
仕方がないから、明日持ってきてね。」

レオン(ふう…。よかった…)

サツキ「明日も忘れた場合は、流石におしおきだからね？」

レオン「げげえっ!？」

今日も、変わらない日常が過ぎていく。

side out

side ????

????「ここはどこだ…?」

気が付くと俺は見たことのない森に倒れていた。

麻帆良学園の森かとも思ったが、どうやら違う。

俺は、ナギの言うとおり本当に別の時空に飛ばされたらしい。

もう何時間も森を歩き続けている。

本来ならば翼を広げて、こんな所とは早々にオサラバしたい所だが…。

???「これがナギの言っていたリミッターとやらなのか…。」

翼を広げることが出来ず、魔法もあまり強いものは出ない。

せいぜい、幽霊とかに実体を作ってやる程度の使う用途のない魔法くらいだ。

森の景色にも見飽きた頃、ふと特別な魔力を感じた。

時空関係の、謎の魔力。俺はその魔力を辿っていく事にした。

魔力を辿り歩くこと数分。ようやく外に出ることが出来た。

魔力はどんどん近づいている。

ふと、俺の目に学校の様なものが見えた。

どうやら、あそここのようだ。

俺は気配を消し、学校に忍び込んだ。そして、大きな鏡がある部屋にたどり着いた。

???「なるほど、この鏡に転送の魔法がこめられているようだ…。」

鏡の中に入り込み、どこかへと転送された。

side out

side エリーザ

エリーザ「あら…?」

エリーザ「変ね…。人の気配は感じなかったのに…。」

エリーザはすぐに異変に気付く。

何の気配も感じなかったのに、転送の魔法が発動したのだ。

エリーザ「…ま、どうせホコリか何かを勝手に吸い込んでしまった  
んでしょう。」

…あと一歩だったのに、侵入者に気付かないエリーザだった。

side out

side 職員室

ロマノフ「変じゃ…。」

すごい老けた男性、ロマノフは水晶を見ながらそう言った。

ロマノフ「すごい老けたとは何じゃ!? 素直に老人といわんか!？」

アメリカ「い…いきなり大声出してどうしたんですかロマノフ先生  
?」

ロマノフ「む…アメリカ君か。ちょっとこれを見てくれたまえ。」

アメリカ「はい?」

ロマノフ「森で異常な魔力を発見したんじゃ。」

魔族なことに変わりはないんじやが、出現の仕方が不自然なのじや。こいつは、森に出現したんじやが、まるでワープしたかのように突然現れたのじや。かといって転送の痕跡もない…。

こいつは一体どういうことかと思ってるの…。  
少し嫌な予感がするのじや。」

アメリカ「は…はあ…。気のせいじゃないんですか？」

ロマノフ「それなら、いいがの…。」

side out

side ????

????「ほほう…これは興味深いな。」

たどりついたのは、謎の迷宮だった。辺りを見回しても、階段だらけ。

????「…？　これが…。思念だけでいつまでも存在し続けている  
魔物…。」

ラプラス「我が…見えているのか？」

????「ああ…。お前は時空を操る魔力を持っているようだな…。」

ラプラス「何故…知っている…貴様…何者だ？」

「????「俺は『セト』だ。ところで、時空を操れるなら、取引をしないか?」

ラプラス「取引…?」

セト「なに、簡単だ。おれはとある時空に行き、ある者に復讐をしたい。

俺がお前を復活させる代わりに、お前はその時空に俺を送ってくれ。」

ラプラス「だが、それでは意味…がない。我もとある連中に…復讐がしたい。

だが、お前を…送ると『立会人』として我も…その時空…にいかねばならない。

それでは、復讐する…ことが出来ない。」

セト「だったら、その連中もその時空に送ればいいだろう?取引成立だ。では復活させてやろう。」

ラプラス「そんなことが出来るのか?」

セト「生ある者には死を…死せる者には生を…。

ア・デル・ク・ラザヒトル!復活せよ!!!」

ラプラスの周りに光が集まり、そして形を作っていく。そして…。

ラプラス「まさか本当に成功するとはな…。」

光が晴れたときには、ラプラスが居た。

セト「で、俺の条件の方だが。」

ラプラス「ああ、そうだな…ぬんっ!!」

セト「…何か起きているようには見えないな。」

ラプラス「いや、奴らをその時空に送り込んだ…では我々も行くのでしょうか。」

セト「ああ…!」

バチバチッ!

二人の前に黒い稲妻が走り、次の瞬間二人は消えていた。

セト（待っているがいい、ナギ…。貴様を殺しに行くぞ!）

第1話 吸血鬼へエヴァンジェリンとの戦い（前編）（前書き）

短めです。

ついに本編に入りました。

## 第1話 吸血鬼へエヴァンジェリンとの戦い(前編)

side レオン

レオン「ん、あ…？はれ？ここは…？」

俺は気が付くと何かよく分からん森にぶっ倒れてた。  
…あと横にユウがいた。

ユウ「……………zzzzzzzz。」

寝てるし。まあそれ言ったら俺も寝てただけだな。

レオン「おい。起きろー！」

ユウ「…うあ？あれ…ここは…？」

レオン「俺も知らん！」

ユウ「…じゃあ夢かな？おやすみ…。」

レオン「おい、こら、二度寝すんな！てか「じゃあ」って何だよ。  
起きろー！」

俺はなるべく弱めにユウの頬を抓った。少し罪悪感があるが、この  
くらいしないと  
こいつは起きないだろう。

ユウ「いたた！？あれ…？ここは…？」

レオン「ようやく起きたか…。此処何処だろうな？」

とりあえず辺りを見回してみるが、まあ森だな。それ以外見えん。もうなんていうか森だな。とにかく森だ、うん。  
ん…森？てことは…。

レオン「ここってアカデミーの迷いのも「それはないと思うよ？」  
ナヌ？」

ユウ「こことあの森とは森の木の密度が違うからね。  
他にも色々違う所はあるけど（中略）まあ何より生き物の気配を感じない  
ってところが、アカデミーとは違うよ。」

レオン「気配、ねえ…。」

そう言われてみれば、俺とユウ以外誰も気配を感じないな。  
アカデミーではよく鳥のさえずりが聞こえたもんだが…。

そんなことを考えていると、何か風を切るような音が聞こえた。

ユウ「レオンさん、危ないっ！」

何が起こったのかは分からんが、とりあえず音が聞こえた方に  
『フレイム・ウォール』  
『炎の障壁』を張り、迫ってくる物を見た。

レオン「あれは…氷？」

side out

side エヴァ

私はその時、森の周りの警備をしていた。歩いていると、炎属性の魔力と、よく解からない属性の魔力を感じた。

気配を完全に消して奴らに近づくと、赤い髪の青年と、栗色の髪の子供だった。

どうやら、炎が赤い髪、不可解な属性はあの子供から発していることがわかった。

兄弟のように見えたが、奴らは何者だ？

まあ、侵入者な事には変わりはない。とりあえず私はフラスコを取り出し、

氷を発射する。すると、何たることか。

「レオンさん、危ないっ！」

レオン、とは赤い髪のやつの事だろう。

そんな事より、レオンとやらはそれを聞き、とっさに大量の炎を自分の周りに張り、私の視界から消えた。

氷は奴の炎に飲み込まれ、消えたようだ。

あんな魔法は見たことがない。この私が永い間生きてきて、一度も見ることがないのだ。

レオン「誰だ!？」

不可解な属性の子供と、見たことのない術を使う青年、か。

フッフ、面白くなりそうだ。



第1話 吸血鬼へエヴァンジェリンとの戦い(前編) (後書き)

戦闘シーンって難しそうだなあ…。

次回は空気を読まずに登場人物紹介

…ごめんなさいごめんなさい。

**登場人物紹介の様なもの（前書き）**

空気も読まずに人物紹介。

エヴァの後半はもうちょっとお待ちください。

## 登場人物紹介の様なもの

Aチーム

Aチームは、主に原作沿いに活躍するメンバー！。

- ・レオン
  - ・カイル
  - ・タイガ
  - ・ユウ
  - ・ケイオス
  - ・ルキア
  - ・クララ
  - ・ユリ
  - ・ヤンヤン
  - ・ライラ
- の10人。

レオン（16）

赤い髪の少年。作者設定では16歳ということになっている。  
炎属性の魔法を使う。

大賢者の息子で、父親の事を悪く言われると我慢できない。

攻撃力の高さで魔力の高さが相まって、メンバー中最高の戦闘力を  
持つ

武器は『フレイム・ウイング炎と疾風の剣』。剣に炎を纏わせる等、  
魔力と合わせた攻撃に特化している。

カイル（16）

青い髪の少年。光属性を使う。

過去に我を失うほどの事件に見舞われ、それ以来いつも笑顔でいるようになった。

攻撃力は低いですが、回復魔法に長けている。

戦闘はしないため、魔導書しかもっていない。

タイガ（16）

黒い髪の少年。レオンと同じく炎を使う。

関西弁で喋る。

攻撃力は高いが、魔力が低くレオンほどの戦闘力はない。

武器は『大剣レッドウイング』赤い龍の翼の形をした大剣。  
ちなみに、赤き翼とは関係ない。

ユウ（12）

栗色の髪の少年。飛び級したため他のメンバーとは歳が離れている。

飛び級した少年で、サツキの弟。

中性的な顔立ちで、女に間違えられることが多々ある。

属性は月。エヴァが「不可解な属性」といつてたのはこれ。

音だけでエヴァの攻撃を察知するなど、危機察知能力が非常に高い。

攻撃力はメンバー中で最低。しかし魔力はメンバーの中で2番目に高い。

武器は持ってない。

ケイオス（年齢不詳）

金髪の男性。属性は雷。

セラの師匠で、極端なほど甘党。

攻撃力は中の中くらい。魔力はメンバー中最高。

武器は無い。

ルキア（16）

赤い髪。属性は炎。

明朗活発で、あまり頭を使うことがない。

攻撃力は割と高い。魔力は普通。

武器は杖。昔助けてもらった大賢者に貰ったもの。

クララ（16）

茶髪の三つ編みでメガネをかけている。

ルキアとは色々と反対。（仲が悪いとかそういう意味ではなく性格が）

攻撃力はユウの次に弱い。魔力は割と高い。

武器は杖。こっちの杖には別にエピソードとかはない。

ユリ（16）

青い髪のツインテールで格闘学科から来た。

ルキアとは親友で、性格が似ている。

攻撃力はメンバー中最高だが、魔力はメンバー中最低。

武器はナツクル。それだけでも十二分に強い。

ヤンヤン（16）

頭にお団子をつけていて、語尾に「アル」をつける。

貧乏。あと明らかに中国人。

攻撃力は高い方だが魔力は低いほう。

武器は素手。中国拳法の使い手。

ライラ（16）

黒い髪で、クロニカの姉。  
まっすぐな性格で、以前魔神に憑かれていた。  
攻撃力は高い方ではなく、魔力はかなり高い。  
武器は魔導書。

## 登場人物紹介の様なもの（後書き）

ネギマサイドは設定も出来上がってるし、  
まあ紹介はしないと思います。

第2話 吸血鬼へエヴァンジェリンとの戦い（後編）（前書き）

レオンとユウはどうなるのか!?

## 第2話 吸血鬼へエヴァンジェリンとの戦い（後編）

side レオン

レオン「誰だ!？」

俺はさっきの魔法を撃ったやつに対してそう叫ぶ。  
何とかかわしたが、当たってたらやばい事になってただろう…。

エヴァ「それはこっちの台詞だ!侵入者が何を言うか!？」

とか言いながら出てきたのは、アロエくらいの歳(だと思う)  
金髪の少女だった。

なんつーか…アロエとシャロンを足して2で割ったような見た目。

レオン「は?侵入者?何だそりゃ?」

エヴァ「何をとぼけてる…。敷地内に堂々とおきながら、  
侵入者じゃないだと?寝言は寝てから言え!」

そついうとあいつは試験管を取り出した。

エヴァ「魔法の射手!氷の十七矢!」

と、奴が叫んだ途端、試験管が炸裂し、さっきの氷が飛んできた。  
何イイイ!?あんな魔法知らんぞ!?

すると、さっきまで機能停止してたユウがようやく動き出す。

ユウ「炎の葉よ!」



…でも痛いよ！勘弁してよ…。胸にこんな刺さってたら普通死ぬよ。  
障壁張っても痛いって事はあいつはかなりの使い手だな…。  
となると、ユウは大丈夫だろうか。  
おそらくあいつはユウの紅蓮炎葉を受けて怒り狂っていることだろう。

多分あいつも障壁張ってるしな…。いや、それより…。

これで、侵入者確定です…。

s i d e o u t

s i d e エヴァ

あの不可解な属性のガキに撃たれた。  
障壁を張ってはいるんだが、相当な魔力で障壁を破られた。  
それより、やはり奴らは侵入者か。

エヴァ「茶茶丸！奴らを叩き潰せ。」

私は茶茶丸を呼び、奴らを潰すことにした。

私といえども、結界の中であんな魔法を打ち込まれては暫く動けない。

茶茶丸「YES、マスター」

ユウ「レオンさんっ！大丈夫!？」

レオン「お…お前のせいだが…。」

奴らは油断している。今のうちに奴らを潰し、捕獲する。  
完璧だ。

ユウ「!?!?やばっ…。」

ユウ「雷よ、我らを守護せよ!」

不意に茶茶丸が停止する。何が起こった…。

ユウ「サンダーウォール。」

どうやら、またあのガキの魔法のせいらしい。  
だが、そろそろあいつも来ることだろう。

私の勝ちだ…。奴らにはたつぷりと事情を聞かねばな…。

???「君達、動くな。」

エヴァ「遅いぞ、タカミチ。」

レオン「んあ?何だ?もともと俺たちは動いてないだろうが。」

タカミチ「とにかく、学園長室に来てもらおうか?侵入者さん。」

ユウ「いや、僕らは侵入者じゃ…。」

タカミチ「…侵入者じゃないにしても、とりあえず事情を聞かなければならない。

とりあえず来るんだ。」

ユウ「は、はい…。」

第2話 吸血鬼へエヴァンジェリンとの戦い（後編）（後書き）

捕獲されたレオンとユウ。さて、どうなる？

第3話 そして今日も変わらぬ日常…？（前書き）

ほったらかしにしてたメンバーを登場させないと…。

### 第3話 そして今日も変わらぬ日常…？

side 学園長室

タカミチ「なるほど、気が付いたらそこにいた、と？」

レオン「ああ。だから侵入者じゃないって言ったんだ。」

とりあえず、レオンが事情を説明する。

朝起きたら森にいたこと、ユウは攻撃するつもりではなく、氷を撃ち落そうとしただけの事…。  
ちなみにそのユウはというと…？

ユウ「……………zzz。」

寝てました。魔力を使いまくったせい…とのこと。

レオン「で、俺らはこれからどうなるんだ？」

タカミチ「む…どうしましょう学園長？」

学園長「フオフオフオ…此処がどこかも分からん者達に対して、はい、さよなら。というわけにもいかんじゃろっ？」

レオン「いや、だから俺らはこれからどうなるんだ？」

学園長「近々、ある教師がやってきてな。その教師の副担任をして欲しい。」

それと、ワシの孫の木乃香の護衛、学園の見回りもな。」

レオン「はあ、副担任ねえ。にしても副担任2人は多くないか？」

学園長「フオフオフオ、大丈夫じゃろう。」

タ・レ（何が大丈夫なんだ…。）

レオン「あと、何故に見回り？そんなもんしなくても…。」

学園長「この世界にも魔物が出る。もしそいつらに出くわして、倒したら報酬がもらえるぞい。」

レオン「やります!!!」

タカミチ「……（汗）」

学園長「ただし、条件があつてな。」

レオン「ナヌ？」

学園長「キミの実力を確認したい。夜11時に、世界樹の前まで来てくれ。」

レオン「はあ。そこで何すんの？」

学園長「ま、詳しいことはあとじゃ。」

レオン「ところで、今日俺らは何処で寝ればいいのか？」

タカミチ「うーん…。とりあえず寮長室にでもとまるかい？」

レオン「ん、ああ。わかった。」

side out

side レオン

まあ、たしかに寮長室だよな。寮長室だけど！

レオン「何で女子寮！？バツカじゃねえのかタカミチ！？」

タカミチ「な…バカとは心外な！僕は確かに寮長室といたただろう！？

誰も別に男子寮とは言っていないだろう！」

レオン「そういうのを屁理屈というんだよ！あのなあ、俺らは男だろ！？

普通男を女子寮長室に案内すると思うか！？思わねえだろ！？」

ユウ「ま、まあまあ二人とも落ち着いて…。」

レ・タ「外野は黙っている…！」

ユウ「うっ…。」

レオン「だいたいユウはともかく俺が女子寮にいたらおかしいだろ！？

「キヤー男が女子寮にいるわー」つって騒ぎになるだろ！？」

ユウ（ユウはともかく！？）ガーン！

タカミチ「そんな事を今更言ったってもう此処しか部屋はないんだ！  
こっちの事情も知らずに文句を言うような奴は野宿でもしてろ！！」

レオン「ああ！？てめえ学園長が俺らを保護するように言っただの  
を忘れたのか！？

てめえは自分の馬鹿さ加減を棚に上げて文句を抜かした挙句、  
学園長の指示にまで背こうってのか！？」

ユウ（うるさいなあ。。。）

タカミチ「何が馬鹿さ加減を棚に上げてだ！？此処しか余ってる部  
屋はないんだ！

さっきも言っただろこのツンツン頭！」

レオン「何だと老け顔！？だったらてめえがここに住んでお前の部  
屋を

俺らに受け渡せや！」

ユウ（あれ…？今この時間って…。）

タカミチ「何がどうなってそうなるんだ！？何故お前みたいな奴に  
僕の生活を侵害されなければならない！？だから文句があるんだっ  
たら

野宿でもして来いと言ってるんだこのトサカヘアーが！」

そして数分後。

レオン「はあ…はあ…。」

タカミチ「はあ…はあ…。」

ユウ「あのさ…。もう11時15分だよ?」

タ・レ「えっ?」

嗚呼、なんと言つことが。俺らが長々と言い合っている間、刻々と時は過ぎ、なんと約束の時間を過ぎていたのである。

そして、あのご老体は俺らのせいですつと立ちっぱなしで待っていることだろう。

俺とタカミチは全速力で寮長室を後にした。

ユウ「…ホウキで行けばいいのに。」  
ごもつともである。

s i d e o u t

s i d e ? ? ?

???「また、さつき置いた目印の石ですね…。」

???「もーやだー!お腹すいたー!」

???「そのくらい誰だつてすいてる。文句言つな。」

???「ちえ、でもさつきまでケイオスだつて甘いものが食いたいつて騒いでたくせに!」

ケイオス「な、何だと！？現在進行形で騒いでるお前よりはまじだ、ルキア！」

ルキア「なにおー！」

????「お、落ち着いて下さい二人とも。」

????「カイル君の言うとおりだ。騒げば余計に空腹が加速するぞ。」

????「ライラあ、世の中正論だけじゃ生きていけないんだよ？」

????「どーでもいいけど此処何処やねんっ！」

????「お腹、空きましたあ…。」

カイル「大丈夫ですか、クララさん？」

????「もうこのキノコでも食べるアル！背に腹はかえられないアル！」

クララ「ヤンヤンさんっ、それは毒キノコですっ！」

ライラ「ハラヘルナリヨタケといって、食べると胃の中のをそのキノコが吸収してしまうという恐ろしい毒キノコだ。」

ヤンヤン「そ、そんなの食べたら余計に腹が減ってしまうアル！」

????「そういう問題じゃないっ！食べたら死ぬよ！」

タイガ、食べてみる？」

タイガ「何故死ぬってことを強調しておきながらワイに食わせようとすんねん!？」

いいから、近づけるなユリ!」

ユリ「はあ、お腹すいた…。カイルはずっと涼しい顔してるけどお腹空かないの?」

カイル「僕だって空いてますよ…。あ、また目印に置いた石ですね。」

ルキア「もう!?!?!何なのよこの森は!?!?!」

第3話 そして今日も変わらぬ日常…？（後書き）

ほっ たらかし軍団始動！

ユリ「誰がほっ たらかし軍団よ！」

バキィッ！

ぐわあっ！

## 第4話 認定試験（前書き）

QMA側の世界はネギまの世界よりも  
戦闘力の平均が全然高いという設定です。

レオンとかユウが今回何となく最強なのはそのせいです。

## 第4話 認定試験

side レオン

今、俺は全速力で走っている！老け顔野郎と走っている！

タカミチのこと  
既に15分も遅刻してるのに、これ以上遅刻したら洒落にならない！

レオン「はあ…はあ…。やっと着いた…。…って、ん？  
だ、誰もいねえええええ！？」

ユウ「怒って帰っちゃったんじゃないの？」

レオン「うお！？いつの間に!？」

ユウ「ホウキでついさっき来た所だけど…?」

レオン「あ、ホウキ使えばよかったのか…。てかタカミチ!!  
お前のせいだぞ!?!お前が長々口論を仕掛けてくるから  
みんなが帰っちゃったんだ!!！」

タカミチ「人のせいにするな!!お前だって口論に挑戦しておきな  
がら!!」

ラウンド2開始!というかしつけえんだよ、タカミチ。  
ラウンド2開始かと思いきや…?」

ユウ「あ、ぬらり、学園長。」

学園長「おお、ユウ君。君も来たのか？」

ていつか何か今いったよな？ぬらりって言ったよな？」

ユウ「いやだなあ学園長、補聴器つけたほうがいいですよ？」

学園長「なんかことごとくワシを馬鹿にしてないか？」

ユウ「きつと気のせいです。」

タカミチ「が、学園長！？怒って帰ったのでは…？」

学園長「何の話じゃ？それよりすまんのう、遅れてしもつて。」

レオン「んだよ、学園長が遅れてたのか…。」

ドキドキして損したぜ、俺の寿命を返せよ。

レオン「それより、此处で何すんだ？」

学園長「なに、簡単じゃ。タカミチとレオン君に闘ってもらう。力の無いものを悪魔と戦わせて、怪我でもしたら大変じゃからな。」

レ・タ「！？」

バチバチバチバチツ！

二人の間に火花が散る。

レオン「勿論、構いませんよ…。」

タカミチ「こいつが僕に近寄ることが出来れば、の話ですがね…！」

学園長「…二人は何かあったのかね？」

ユウ「さっき女子寮に案内されたことにキレて、  
すごい口論をしてたんです…。」

学園長「どつりで…。タカミチ君が殺気を発しておる…。  
だが二人の事は二人で解決するのが一番よいじやろう。  
では、試合開始じゃ…！」

学園長から試合開始の合図がされる。

すると開始早々にタカミチがポケットから手を出す。

タカミチ「左手に「魔力」…右手に「気」…。」

タカミチの手が光りだす。何をする気だ？

タカミチ「合成…！」

あいつがそういつと空気が重くなり、戦闘力が上がる。  
へえ〜強化魔法か。

タカミチ「豪殺居合い拳…！」

レオン「フン、ユリに比べれば全然弱いな、  
炎の障壁」  
ファイアウォール

障壁により豪殺居合い拳がかき消される。

タカミチが目を白黒させている。まあそれはそうだろう。  
なんせエヴァも驚いていたからな。

タカミチ「なかなかやるね、レオン…。」

エヴァが言っていた通り見たこともない魔法を使う…。」

レオン「俺の情報が漏れてんのかよ…。(汗)  
まあい、今度はこっちからいくぜ！！疾風の瞬間」  
ウイング・ムーヴ

俺は技を発動させた。

side out

side タカミチ

急に僕の視界からレオンが消える。  
しかし、僕の背後にレオンの魔力を感じた。

タカミチ「そこだっ！！」

僕は背後に豪殺居合い拳を放つ。

手ごたえ、無し。

レオン「ハイ、残念。  
烈火剣！！」  
バーニング・ソード

タカミチ「ぐっ」。。

背後に魔力を感じた僕は、そちらに気を向け、  
自分の背後に気を配らずにいた。

しかし、レオンは背後にいて、そして僕は斬られた。  
これが何を意味するか…。

防御する事無く、斬られたという事。

タカミチ「ぐああっ!!」

学園長「ウム…そこまで!どうやら実力は申し分ないようじゃ。」

タカミチ「くっ…。」

学園長「ところでユウ君。君はどうするかね?」

ユウ「え、何がですか?」

学園長「君も見回り及び魔物退治を手伝ってくれないか?」

ユウ「うん…。いいですよ?でもまた認定試験やるにしても

タカミチさんは今の戦闘で…。」

タカミチ「いや、大丈夫だ。さっき回復しておいた。

こんなこともあるうかとね。」

学園長「ウム、ならばもう1度認定試験を開始する!」

タカミチ「手加減はしないよ、ユウ君?」

ユウ「望む所ですっ!」

タカミチ「居合い拳!!」

僕は居合い拳を放つ。

しかし、ユウ君も魔法で、相殺したようだ。

その際、地面に電撃の様なものが走ったが…?

あれは何なんだ？

すると、ユウ君のが青白く光りだした。背筋に恐怖が走った。あの光は一体…。あの光には恐ろしいほどの魔力が入っている。あれを喰らったら…下手したら死ぬ！！僕はすぐさまあれを回避しようと動いた。いや、正確には「動こうとした」。

-. -. -. -. -. 体が、動かない。

まさかさっきの電撃は…このために!？

ユウ「無<sup>ゼロリバース</sup>への帰還（小）！！」

手から青白く極太の光線が発射される。僕は全ての気と魔力を防御に回した…。

タカミチ「ぐあああああああ！！！！」

学園長「ウム…勝負ありの様じゃな。」

ユウ「だっ大丈夫！？タカミチさん！！」

レオン（お前がやったんだろが（汗））

学園長「これで認定試験は終了じゃ。明日から頼むぞい。」

レオン「報酬…報酬…。」

ユウ（汗）

side out

side 迷子組

ルキア「方位磁石が使えない〜！」

ケイオス「…さながら樹海だな。」

カイル「また目印の石ですか…。」

ユリ「もう〜帰りた〜い〜！！！」

#### 第4話 認定試験（後書き）

ゼロリバース 使用者：ユウ、ラプラス

世界に破滅をもたらす光。

（最強）（強）（普通）（弱）（最弱）  
と、パワーの調節が可能。

最近なんか小説ではなくなってきている。

## 第5話 動き出す神々(前書き)

ちよつと反省して小説っぽさを取り戻しました。  
取り戻したんじゃないかな? うん。

## 第5話 動き出す神々

side セト

俺とラプラスはナギのいる時空へと飛ばされた。

それと同時にラプラスの復讐対象もこの時空に飛ばされたようだ。俺が此処に帰ってきた目的はたった一つ。

セト「ナギ…。どこにいる…。」

一刻も早くリミッターを解除し、ナギを、赤き翼を殺す。そして、この世界を今度こそ支配する。

今度こそ、馬鹿共にくだらないう邪魔はさせない。

それが俺の最終目標。

セト「ナギ…どこにいる…！」

side out

side ラプラス

あいつらをこの時空に飛ばした方がいいが…。

…どこに居るのか見当もつかん。

セトに聞いてみても

セト「あいつらをこっちの時空に送ったのはお前だろう？  
どうして俺に聞くんか。それより俺はナギを探してくる。」

とかいつてどこかへいつてしまった。

時空移動が私の仕事だと気付かれ、再び「瞬間のくさび」を作られぬうちにせめてセラだけでも始末しなければ…。

しかし、それにはまずこの世界について知る必要があるだろう。

そして我は、過去と未来のビジョンを自分の前に作り出した。

ラプラス「なるほど…：だいたいの地形は理解した。(はやっ！！)そして途中で見えた赤い髪の男がセトの探すナギとやらなのか…。」

しかし我には弱点がある。

奴らに指摘されようやく気付いたが、過去や未来を把握することは出来ても

「現在」を把握することは出来ない。

未来には無限の可能性がある。我の見た未来は

「現在」の動きにより全く別のものになることがある。

「あの時」がまさしくそうだった。

奴らは瞬間のくさびの暴走により消滅するはずだった。

しかし瞬間のくさびは完成し、私の力を封じた。

そして我は奴らにより消滅した…。

未来が見えなくなった我にはセトが来ることなど

想像すら出来なかった。

しかし、これが奇跡というものなのか。

奴らに復讐することができる。

そしてこの時空に瞬間のくさびは存在しない。

新たに作られぬ限りだが。

そのためにも早く瞬間のくさびを作ることができるセラを始末し、奴らに復讐する。

それが我の最終目標…。

side out

side 森

静かな森に騒がしい気合の音が聞こえる。

レオン「うおらああっ!!」

レオンが放った技により、悲鳴をあげながら魔物が消滅する。

レオン「いよっし!また1匹!」

報酬がもらえると聞きすつかり盛り上がったレオンは、  
魔物が現れるとすぐに駆けつけ速攻で魔物を倒している。  
その姿はまるで狩人の様である。

エヴァ「朝からやかましい!安眠妨害だ!!」

森の奥からエヴァがキレながら出てくる。

エヴァ「そのやかましい声を何とかしろ!  
うるさすぎて眠れやしない!」

レオン「うるせえなあ〜この声は気合だ!  
それよりお前の声の方がうるさいわ!」

エヴァ「何だと…?」

流石に今の言葉にはキレたのか。  
不気味とも思える笑顔で試験管を取り出すエヴァ。

レオン「あ、怒っちゃいました?」

エヴァ「ええ、怒っちゃいました」

レオンの顔からどんどん血の気が引いていく。

レオン「まって!話せば分かる話せば分かるから!」

エヴァ「魔弾の射手!氷の17矢!」

レオン「ぎゃあああああ!」

…今日も麻帆帆良は平和である(?)

side out

side 迷子組

ルキア「あれ…今レオンの声が聞こえなかった?」

カイル「そうでしょうか?僕には何も…。」

ユリ「ほほ、幻聴を聞くほどレオンに会いたいのかな?」

ルキア「ユリリン、なめてんのか」

クララ「ルキアさん落ち着いてください！  
キャラが崩壊してますよ！」

ケイオス「お、石（目印に置いた石）だ。」

ルキア「イライライライライラ」

ユリ「おおっ！？怒りのオーラが実体化して見える！」

第5話 動き出す神々(後書き)

更新ペース急速低下中!!

## 悪役キャラ紹介（前書き）

セトと違って謎が多いよね？

だから紹介してみよう！

まだ出てない奴が約1名。

## 悪役キャラ紹介

セト（年齢不詳）

このストーリーの真の悪役。

一人称は僕（いい人を装っているときだけ。本当は俺）。

世界の「影」から生まれ、影関連の技を使う。

普段はTシャツをきてメガネをかけている。茶髪。

現在はナギによって100個のリミッターをつけられている。

とりあえずめっちゃくちゃ強い。

リミッターが無い状態だと赤き翼全員を1撃で倒せるくらい強い。

リミッターがついててもラカンあたりだったら楽勝。

セト使用技

コピー

影として長い間世界を見つめ続けた結果生まれた技。

相手の技を一回でも見ると完全にコピーする。

ダイク・フォルム  
半端融合

自分の真の姿と擬態時の姿を中途半端に融合させる。

腕だけを融合したり、翼を融合させたり。

ちなみに腕を融合しただけでめちゃくちゃ戦闘力が上がる。

リミッターがついている現在は使用不可。

かげまね  
影真似

近くの影に溶け込む。

例えばどんなに目が良くても見つけることは不可能。

リミッターがついている現在は使用不可。

マジック・バースト  
魔導弾

魔力の塊を投げるだけ。  
しかし威力は充分。

シャドウマジックバースト  
影魔導弾

魔力の塊に影の力を付加する。  
喰らうと体が段々消えていく。防ぐには自分に光属性の魔法を  
かけると体の侵食が止まる。  
リミッターがついている現在は使用不可。

こうそくしゅんどう  
光速瞬動

光の速さで移動する。  
ので、元居た場所に分身が見える。  
セトだからこそ使えるが他の人がやろうとすると  
壁に思いっきりぶつかるだけ。  
リミッターがついている現在は使用不可。

ア・デール・ク・ラザビトル  
霊体復活術

幽霊とかに実体を作ってやる魔法。  
ラプラスはこれで復活した。

ジ・エンド・オブ・シャドウ  
世界終焉

羽根をひろげ、宙に浮いた状態で使用する。  
自分から影の魔力を発し、世界全体を侵食させ消滅させる。  
まさに最後の手段。  
シャドウマジックバーストと違い、光の魔法を当てても消えない。  
それどころか魔法を当てると吸収して侵食のスピードが上がる。  
リミッターを全て開放しないと使えない。

魔神ラプラス（年齢不詳）

セトにより復活したqmad s2に登場するラスボス。

過去と未来を見ることが出来る。

1度消滅したが思念だけで無限迷宮に存在し続けた。

瞬間のくさびにより力を大幅に制限できる。

消滅させられてからは自分の未来予知能力をあまり信じていない。

ラプラス使用技

過去透視

過去のビジョンを自分の前に表示し、過去を見ることが出来る。

未来透視

未来を見ることが出来る。

ゼロリバー

自分の前に巨大な魔方陣を作り、そこからレーザーを発射する。

ユウが使うゼロリバーとはちよつと違う。

キマイラ「ウエアルス（12000歳）

ネギまの世界に存在する神獣。

ネギまの世界に存在するすべての生物に擬態できる。

その時力も一緒に擬態する。

セト達の時空移動により精神に異常をきたし、暴走する。

5 / 10 後付け設定

もとはと言えばネギまの世界を守護する神獣だったが、前述の通りセトのせいで精神に異常をきたす。

それからもう暴走して森は火の海にするわ  
海は枯らすやりたい放題。

キマイラ使用技

擬態

ネギまの世界の全てのものに擬態できる。  
異世界から来たレオンやラプラスなどには擬態できない。  
セトもネギま世界の住民だが時空移動の影響で擬態できない。  
あとナギに擬態したりも出来る。

悪役キャラ紹介(後書き)

セト、チートすぎだろ…。  
自重しろよ

第6話 ふくしゅウへ1 (前書き)

注意！後半部分にかなり痛々しい表現が含まれています。  
セトがラカンを尋問します。

## 第6話 ふくしゅウへ1

紅き翼、見つけたぞ…。

さて、とはいえ奴ら全員をこの状態で相手するのはきついな。  
誰か一人に絞らねば…。

ラカン、お前に決めた。

side 影国

ラカン「ここは…。」

俺は気付いたらよくわからない場所に立っていた。

足は地に着いているが、目で見ると浮いているようにしか見えない。  
辺りの景色は歪んだ赤黒い壁。

行けども行けども終わりが無く、本当に歩いているのか疑問に思う。

暫く歩くと目の前に突然真っ黒い炎が上がる。

ラカン「なっ何だ!?!」

????「やあ…ラカン」

黒い炎が消えると、予想もしていないやつが立っていた。

セトである。

自分の目を疑った。奴はあの時確かに意地空に送り飛ばしたはず。

セト「何を驚いている?ラカン」

ラカン「何故、お前が…。」

セト「言ったただろ？ラカン。俺はあの時、  
『必ず戻って来る』と。」

ラカン「…此処はどこだ？」

セト「俺とお前が2人きりになれるように作った  
仮想空間『影国』だ。気に入ってくれたかな？」

ラカン「…随分と悪趣味な空間だ。」

セト「そんなに褒めて貰っては困るな。」

ラカン「お前の目的は何だ？俺をこの時空に閉じ込めてどうする？」

セト「単刀直入に言おう。リミッターの解除方法を聞きたい。」

ラカン「教えると思うか？」

セト「言わないなら、力づくで聞くまでだ。」

ラカン「できるかな…！！」

俺はアーティファクトを発動させようとした。  
しかし…。

セト「無駄だ、影傀儡」

セトは技を発動した。

それと同時に俺の体は一切言う事を聞かなくなる。

見ると、セトの手から糸の様なものが俺の影に向かって伸びている。俺の影の眼の部分が赤く光って、手を後ろに回す。

すると、何と言う事か。俺の体まで勝手に動き手が後ろに回る。必死に体を動かそうとするが、どうやっても動かない。

セト「無駄だと言っているだろう？影に逆らうことは出来ない。」

ラカン「……………」

セト「口も動かないだろう？影が動かない限りお前の体は動かない。そしてお前の影を操っているのは俺だ…。これが何を意味するか分かるか？」

セト「お前は自分の意志で体を動かすことは出来ないし、俺の意志でしか動かないということだ。」

セト「自分のアーティファクトで自分の首をはねるか？」

そういうと奴は糸を動かした。

すると俺の横にアーティファクトが現れる。

剣に変化し、俺の首に当てる。

剣の冷たさが俺の恐怖を煽っていた。

セト「俺の用件を飲めば、手荒な真似をする気は無い。

さあ、リミッターの解除方法を言ってもらおう。」

糸が切れ、俺の体が自由になる。

ラカン「誰が、言うか…！」

セト「そうか…なら仕方ない。」

再び奴の手から糸が出現する。

横とびで回避しようとするが、糸は俺の行動よりもずっと早い。くねって方向転換し、俺の影に突き刺さる。

セト「自由できるように口だけは動くようにしておこう。  
さあ、早く言えー!!」

ラカン「言わないと、言ってるだろ!」

セト「しつこい奴だ…。」

そう言うとセトは何処からとも無く黒くて長い針の様なものを取り出す。

そして、俺の体に突き刺した。

ラカン「ぐああああーっ!」

セト「早く言わねば死ぬぞ?」

ラカン「くっ…誰が…言うか!」

セトはもう一本針を取り出し、俺に突き刺す。

ラカン「ぐあああ!」

セト「そんなに死にたいか?」

ラカン「はあ…はあ…」

ふくしゅウ《2》へ続く…。

第6話 ふくしゅウへ1 (後書き)

影傀儡 使用者 セト

相手を拘束し、意のままに操る。

糸を回避しない限り、絶対に抜け出せない。  
当たったら最後。

第7話 ふくしゅウへ2 (前書き)

前回到引き続き痛々しい表現があります。

## 第7話 ふくしゅウへ2

side ラカン

ラカン「はあ…はあ…」

セト「粘っても意味無いと思うけどな」

俺の体には現在2本の針が刺さっている。  
針といっても長くて太い奴。正直相当痛い。

セト「さて、もう1本か？」

それともリミッターの解除方法を言つかい？」

ラカン「誰が…！」

セト「フン…」

セトはもう1本針を取り出す。

ていうかあれどっから出してるんだ…。

そして再び俺の体にもう1本針を突き刺した。

ラカン「ぐあああああ！」

セト「どっちにしる君は自白するんだから

早めに言っただけ痛みを少なくした方がいいと思うけどな」

どっちにしる言っただけ…？

フン…誰が教えるか…。

セト「命は大事にした方がいいと思うよ?」

そういつてセトはもう1本の針を俺に突き刺す。

ラカン「うああああ!」

口から血の泡が出てくる。

おそらく針で肺を突き刺したせいで起きる現象だ。

気絶した方が楽とは思うが、俺は悲しいほどに気絶できなかった。

セト「今君には4本も針が刺さってる。

早く言わないと本当に死ぬよ?」

さっきより声色が冷たい。

俺がしぶといので相当頭に来ているのだろう。

しかし俺は頑なに解除方法を言わなかった。

解除方法を教えたらナギが、そして世界が危ない。

するとセトは、呪文の詠唱を始めた。

セト「エレクトリツコサンダー!!」

呪文の詠唱が終わるとセトは俺に刺さっている針に対して電撃を流す。

針は金属なので電気を通し、俺の体に電撃が諸に走る。

ラカン「ぐああああああああああ!」

ああああああああああ!」

異常な叫び声をあげ、俺の意識は闇に沈んだ。

side out

side セト

セト「…ようやく意識が落ちたか」

意識が落ちないと意味がない。

俺の先ほどまでの執拗な攻撃の本当の目的は、ラカンを無理矢理喋らせることが目的じゃない。

ラカンに自分から喋ってもらうことだ…。

そして俺は再び影傀儡の糸を動かした。

ラカンの影が光り、影の口が開く。

セト「影傀儡・言！」

俺は影傀儡・言を発動させた。

影傀儡・言とは、相手の意思に関係なく情報を喋らせる技。気絶しないと使えないため、俺はラカンを気絶させたのだ。

セト「さあ、言え…リミッターの解除方法を！！」

ラカン「リミッターの解除方法は…世界各地に広がる

『リミッター中継水晶』を破壊すること…」

セト「水晶？そいつはどこにある？」

ラカン「リミッターをつけた際、飛んでいったので、把握しているのは麻帆良に存在する10個のみです。」

セト「ち…役立たずが。まあいい、麻帆良に向かうか。で、麻帆良の何処にある？」

ラカン「この者の記憶に存在しません」

セト「本当に役立たずだな…。まあいい。

こいつのアーティファクトはコピーできたからな。」

俺は影国を解除し、麻帆良を目指した。

s i d e o u t

s i d e レオン

俺がいつものように森で魔物を狩っていたその時だった。

レオン「何だ？コレ…。」

キラキラと光る大きな水晶みたいなものが宙に浮いていた。

レオン「キレイだな…。」

暫く見ていると水晶が動き俺の手に乗った。

まるで水晶が俺を好いているかのように。

レオン「ん…まあせっかくだから貰っていくか」

そして俺は水晶を持って部屋に帰った。

第7話 ふくしゅウへ2 (後書き)

レオンが拾ったのは…お分かりでしょうか。

次回ようやくAチーム再会。

**第8話 悪夢から覚めた後（前書き）**

久々(?)のqmaの皆さんが登場。

## 第8話 悪夢から覚めた後

side 森

「はあ…はあ…」

森に荒い息遣いが聞こえる。  
そして、もう一つの声。

「グルルルオオオアアア！！」

頭が2つある、謎の獣。

その獣が先程まで口にくわえていた人間の死体を森に吐き捨て、  
荒い息遣いのカイルを追う事に集中する。  
そしてその捨てた人間は…ケイオス。

「くっ…。ケイオス、さん…」

「グルルルオオオアアア！！」

（ここまでか…）

獣はカイルに食いつき、牙を立てる。  
カイルの体から血が迸り、そして動かなくなる。

「グルルルルオオオアアア！！！！」

獣はカイルを吐き捨て、再び獲物を探しに行った。

「カイルっ…!!」

木の陰に隠れていた女子達が出てくる。

「何なのよ一体…!? ケイオスやタイガも…」

そう言ったのはルキア。

ケイオスの顔にルキアの涙が零れ落ちる。

すると、遠くからあの忌わしい声が聞こえてくる。

「グルルルオオオアア!!」

「ま…まさか…」

再びあの巨大な獣が近づいてくる。

先程、ケイオスやタイガ、カイルを殺した獣。

「きゃあああああああ〜!!」

森に悲鳴が響いた。

side out

side 女子寮長室

「うわあ!?!」

レオンは目を覚ました。

ベッドが汗で濡れている。

「おはよ。どうしたの？」

ユウがやってきた。

「あ、ああ…悪夢を見た。」

「悪夢…？」

俺はその夢を見て目覚めてから、ある考えがあった。昔、こんな話を聞いた事がある。

夢には不思議な力がある。

不思議な力とは、「予知夢」や「正夢」…。

つまり夢で未来が見えたり、現実と同じことが見えたり。もし、あの夢が正夢だったら…。

俺の考えとは、他の皆をそろそろ本格的に探すこと。

幾らなんでも、俺らだけがこんな所にいきなり飛ばされるといっても変な話だ。

他の皆も飛ばされている可能性も無くはない、むしろその可能性は高い。

考えたことはすぐに行動した方がいい、俺はすぐにベッドから起き、森に行く準備を始めた。

「ユウ、森に行くぞ。」

「え？また今日も狩りに？」

「そうそう、魔物を狩りに、って違う!!  
前に話したことあったろ？他のみんなもこっちに来てるんじゃない  
か…  
って話だ。」

そろそろ本格的に行動した方がいいんじゃないかと思ってな？」

「成る程…レオンさんらしい考え方だね！」

「…それどういう意味？」

ユウは天然なのか、たまに酷い事をサラッと言ったりする…。  
覚えているだろうか。検定試験のときの事を。  
学園長にぬらりひょんと言いかけた事を…。  
まあそれは兎も角、森に行くことにしよう。

side 森

「お腹すいた〜!!」

現実はこのんなものである。まだこの連中は森で迷子になっていた。  
しかし、ここからはレオンの夢が的中していくことになる…。

「…グルオ…。」

「…？ 今、何か聞こえたような…？」

「どしたの？ライラあ。」

「いや、今森の奥から何か声が。」

「確かに聞こえたな。…それとメチャクチャ強い魔力もその森の奥から感じたな。奥に何かいるようだ。」

「どうします？行ってみますか？」

「考える前にまず行動！皆、行くよ！」

「ユリさんらしい考え方だな。」

「ライラ、それどういう意味？」

どこかでこのやり取りを見たような…。  
そんな事より一同は森の奥を目指す。

それと同時に、レオンとユウも森に到着。  
二人も強い魔力を感じ、森の奥を目指す。

さらにそれと同時に、危険な魔力を感じ取った  
エヴァとタカミチ。  
2人もまた、森に来ていた。

一同を引き寄せた巨大な魔力の正体とは…？

「グルルオオアア…！」

side out

side セト

「フン…。いい加減歩くのも面倒だ…。」

すると前方に村の様なものを見つけた。

あそこで暫く休息をとるか…。

しかし、何だか村が騒がしい…。

「何事だ？」

「あ、紅き翼のラカン殿が村の近くでもの凄い怪我をして倒れてたんです」

「ラカン…。フン…。」

どうやらこの村でも急速は取れないようだな…。

だが、ラカンに精神的ダメージを与えるいいチャンスだ。

## 第8話 悪夢から覚めた後（後書き）

エレクトリックサンダー（使用者 セト）

対象に落雷と同じ電撃を流す技。

REBORNのヴェルデのアレとは違う。

セトがコピーにより手に入れた技だが、一体何処でコピーしたのやら…。

セトの能力説明。 (前書き)

まさかの2度目。

## セトの能力説明。

「またかよ…悪役キャラ紹介でやっただろ？」

「いややりましたけど…『真の姿』についてはやってないでしょう？  
あと、あの後色々と更に技が出てきたので…。」

「あゝそついやそつだな…てかお前誰だ。」

「ひ、酷いことを…！」

「いや、実際知らないし」

そいつはセトの従者…のハズだったんだけどさ。  
あんまり存在意義がないかな〜とか思ったんで没にした。  
まあ、いわば没キャラだな。

「ふ〜ん…。別に要らない」

「ああっ！？か、体が消えていく…！だれか助…」

セト『イングリシア』真の姿』（年齢不詳）

セトの真の姿。

全身真っ黒で悪魔のような外見。真っ黒い翼が生えている。

ダイク・フォルム  
半端融合で擬態時の姿と中途半端に融合する。

腕の悪魔化とはこの姿と擬態時の姿を中途半端に融合したときのもの。

目の色がちよくちよく変わる。  
赤とか青とか金色とか。

## 真の姿 使用技集

デス・ナイトメア  
死の悪夢

自分の周囲300kmに悪夢を見せる技。  
一般人だとこれでショック死したり自殺したりする。

コメント「300kmは広すぎだろうっよ」

インフイニティ・ネイル  
無限の爪

もの凄いスピードで突きを繰り返す。  
残像が見えるので相手からだと言が増えたようにすら見える。

コメント「マジで自重しろ」

デッド・アルテマ・クラッシュヤー  
究極殺戮葬

セトの最後の手段の一つ。  
周囲500kmを異時空に飛ばし、消滅させる。

コメント「最後の手段がいくつあるんだ」

ジ・エンド・オブ・カオス  
世界終焉2

セトの最後の手段の一つ。  
世界を丸い小さな一つの球体にし、破壊する。  
つまり世界ごと破壊する。  
ちなみに本編では登場しない、いわば没技。

コメント「最後の手段がいくつ（ry」

セトの最後の手段の一つ。

自分を中心として規模を異常なほど大きくしたゼロリバーを  
全方位に放つ。

ちなみに本編では登場しない。

コメント「もはや何も言うまい」

そついやセトって時空移動しすぎじゃないか？

「まあな、another storyで1回。

で本編でまずナギに送られて1回。

その後ラプラスに送られて1回。

で、わけあってあと2回移動する。

で『転生紳は暇で暇でしようがない』で1回…。

おそらくいずれまた移動するんだろうな（ギロリ）」

ま、まあそうだろうな。

さて、今日はこの辺りで！セトにボコられそうなので…！

「ほう、よく分かったな、じゃあ死ね」

ギヤアアアアアアアアア

セトの能力説明。 (後書き)

次回、巨大な魔力の正体が明らかに！  
…って分かる人は分かるんだらうけど

## 第9話 再会、そして…。(前書き)

ユウ君の武器を変えました。

それと同時にこれまでの一部シーンも変えました。

「テガミバチ」のラグに何となく似てるので銃にしたんですが、  
やっぱりおかしいかなあ…と思ったので変更。

## 第9話 再会、そして…。

side レオンとユウ

レオン「さつき変な魔力を感じたのは森の奥だよな…。」

ユウ「でも、皆の魔力じゃないよ?」

レオン「だけど、皆がそれを嗅ぎ付けて集結してるかもしれないぜ」

2人は森の中を奥へ奥へと歩いていった。

そして、おそらく最深部であろう場所にたどり着いた時。

2人が感じた変な魔力はレオンの夢に出てきた「奴」が放つものだった。

レオン「こいつは…。」

???「グルオオオオオ…!!」

2人を警戒したのか敵意を剥き出しにして2人を睨み付ける。まさに背筋が凍るかのような威圧感だった。

そして、近くの叢からガサツと音が聞こえた。

レオン「誰だ!？」

side out

side 迷子組

ユリ「まだ着かないの〜？」

ケイオス「何故お前は我慢というものを知らないんだ…。あと少しだ。」

さっきの異様な魔力は段々大きくなっている。」

カイル「ケイオスさん！ユリさん！それとは別な魔力を感じます！」

ケイオス「何！？」

ユリ「あ、そー言えばそうだね。」

タイガ「一体誰や…？」

ケイオス「とりあえず十分に気をつけていくぞ…。」

そして一同は森の奥へ奥へと潜っていった…。

そして最深部。

ケイオス「魔力が近い…おそらくこの奥だろう。」

ケイオスは一呼吸入れ、

ケイオス「よし、行くぞ！」

中へ入っていった。

中に入ると、聞き覚えのある声が聞こえた。

レオン「誰だ！？」

side out

side 最深部

ルキア「レオン！？ユウ君も！」

レオンは暫く驚いていたが、

レオン「ほら！やっぱり俺の言うとおりみんなは森に居たる！？とすぐに開き直った発言をした…。

ケイオス「お前らは今まで何処にいたんだ！？」

ユウ「えーっと…エヴァさんに見つかって何故か副担任になって暫く魔物を狩ったりしてたよ」

タイガ「ゴメン、意味分からん」

「グルルルオオオアア！！（何だ貴様らは！！）」

「「「「「！？」「「「「「」

耳では鳴き声しか聞こえなかったが、一同の頭に謎の声が響いた。低く、邪悪な恐ろしい声。（c v 金丸 淳一）（メタルソニックの人）

「グルオアア！グルルオオオアア！！（ここは私の領域だ！早々に立ち去れ！！）」

「グルトオオアア…（立ち去らないのならば…）」

「グルルルオオオアアア！！（貴様らを叩き潰す！！）」

レオン「…っと。話は後だ、こいつを何とかしないとな」

タイガ「こいつはなんなんや？」

レオン「俺が知るか！とりあえずわかるのはこいつは俺らの敵だ」

カイル「いや、ただ立ち去ればいいだけじゃ」

カイルの言い分は最もであったが、レオンの脳内にあるのは、

「報酬」だった…。

つまりコレを始末すれば報酬がもらえる、ということである。

再びガサツという音が聞こえた。

そして、

「居合い拳！」

現れたタカミチは居合い拳を放った。

しかし、謎の魔物も

「グルルトオオアア！！！！（愚かな！！！！）」

頭突きで居合い拳を相殺。

さらに、

「グルル、グルルトオオア！！（やはり、貴様らは私の領域を汚すも

のか！)」

「ググルルルルオオアアア！！（このキマイラ様の安住の地を  
！！）」

エヴァ「キマイラ…？」

キマイラ「グルルオオアアア（ならば容赦はしない！死ぬがいい  
！！）」

タカミチ「皆、避ける！！」

その瞬間、もの凄い衝撃と共に空を切る音が聞こえた。  
そして、後ろの木が真っ二つになった。

レオン「なっ。。」

side out

side セト

名も無き村長「おお…これは悪夢じゃ！！」

セト「フン…なかなか使い勝手のいいアーティファクトだ。」

セトは地獄絵図となった村の中心に立っていた。  
家は焼け崩れ、村人は全て死に。  
ラカンの『千の顔を持つ英雄』を手にしながら。

今から、数分前。

セト「ラカンがいるのはこの小屋か？」

名も無き村人「そうだ…あんたは誰だ？」

セト「俺の名前は…。」

セトは『千の顔を持つ英雄』を出す。

セト「死神だ」

そう言い放ち、セトはアーティファクトを鎌に変化させ、

村人の首をはねた。

名も無き2「なっ!？」

名も無き3「あんたいきなり何やって」

セトは次々に他の村人の首もはねていった。

名も無き2「ガッ」

名も無き3「うあっ!」

セト「ハハハハハ!!」

side out

第9話 再会、そして…。(後書き)

セトとかキマイラとか何が目的なのかわからんよね

**第10話 麻帆良の森の大決戦！（前書き）**

更新が遅れました。

さて、キマイラが出てきます。

## 第10話 麻帆良の森の大決戦！

side 最深部

レオン「な…。」

キマイラ「グルウルルル（チツ、外したか）」

キマイラの放った謎の攻撃により、一同の後ろの木が真っ二つになり倒れた。

空を切る音からして、豪殺居合い拳の様なものらしい。

キマイラは尻尾を振り上げ、再び技を出す体制に入る。

そして、尻尾を思い切り振った。

キマイラ「グルルオオア！！（ウイングスラッシュュ！！）」

今度は確認することが出来た。

弧の形をした衝撃波が尻尾から出ているのだ。

そして、一同は再び回避する。

キマイラ「グルルルル…！（ちょこまかと目障りだ…！！）」

レオン「俺がいつまでも逃げてる訳ねえだろ！！」

そう叫びながらレオンはキマイラに剣を振り上げ飛び掛った。すると、ガキンツ！という大きな音が聞こえた。

キマイラには傷一つついていない。

そして、レオンの剣は今にも折れそうなほど刃こぼれしていた…。

レオン「な…なんつー硬さだ…!?!」

キマイラ「グルッ！（フンッ!）」

キマイラはくるりと1回転する。

すると尻尾も1回転し、レオンを薙ぎ払った。

レオン「ぐあっ!」

タカミチ「くそ…!豪殺居合い拳!」

タカミチは再び豪殺居合い拳を放つが…。

キマイラ「グルアアアア!」（無駄だ!!ウイングスラッシュ!  
!）」

タカミチの豪殺居合い拳は消され、ウイングスラッシュの衝撃波は  
残り、

タカミチに激突した。

タカミチ「ぐあああ!」

ケイオス「皆、聞け!

どうやら見ていると、こいつに物理的攻撃は効かない!

魔法を使え!」

キマイラ「グルッ！（チッ!）」

ケイオスの作戦は合っていた。

キマイラの体は驚異的な硬さを誇るが、魔法には弱い。

マジックキャンセルなどの能力は持っていないからである。

ケイオス「サンダーstorm!」

ケイオスは魔法を放つ。

ケイオスの魔法は雷の属性の球体を相手にぶつける魔法である。

キマイラ「グルアアアアア!!(ぐああああああ!!)」

キマイラは叫び声をあげる。

どうやら雷に弱いらしい。

しかし、キマイラにはまだ手があった。

キマイラ「グルルル...(くつくつくつく...)」

ケイオス「何を笑ってる...?」

キマイラ「グルアアア!!(擬態、発動!!)」

キマイラの体を光が包む。

目が開けられないほどのまぶしい光だった。

そして、光が晴れたとき...

タカミチ「明日菜...君...?」

神楽坂明日菜の姿がそこにあった。

明日菜? 「クツクツクツク...これでもう、私に魔法は通じない!!」

明日菜の声は、レオン達の頭に響いた、あの声だった。

そして、明日菜は巨大な剣を取り出した。

side out

side セト

そして舞台はあの地獄絵図の村に戻る。

名も無き村長「ど、どうかお慈悲を……」

セト「くれてやるぜ、代わりにラカンにこう伝える。

『この村はお前の無力ゆえに滅びた』、とな。」

村長「な、ラカン殿はそんな」

セトは続きを話そうとする村長の首に鎌を突きつける。

セト「嫌なら皆と同じ姿になってもらおう」

村長「ヒイツ！！わ、わかりました……」

セト「それと、何か乗り物をよこせ」

村長「の、乗り物？そんなもの我が村には……」

セト「じゃあ、お前の家を貰おう」

セトは村長の家の屋根に乗り、家の影に糸を伸ばす。

セト「影傀儡」

すると、家が浮き上がり、セトを乗せてどこかへと飛んでいった…。

第10話 麻帆良の森の大決戦！（後書き）

乗り物が家って…。

なんか間抜けな感じが…。

にしても、影傀儡はあんなふうに応用も出来ませぬ。

第11話 堕ちた神獣（前書き）

今回、セリフだらけ。

## 第11話 堕ちた神獣

side 最深部

明日菜？

「フフフ…さあどうする？馬鹿共よ」

明日菜に化けたキマイラは刀が全て真つ赤で持ち手に髑髏のついた剣を取り出す。

そして、明日菜はタカミチに斬りかかった。

明日菜？

「くっえ！！」

タカミチは何とかそれを回避する。

しかし明日菜の背中から尖った翼の様なものがタカミチに向かって伸びた。

タカミチ

「くっ！！」

明日菜？

「防御など無意味だ」

タカミチは何とか防御したが再び明日菜は体を翻してタカミチに斬りかかる。

そして、今度は斬られた。

タカミチ

「ぐああああっ!!」

タカミチの体から血が迸る。

明日菜？

「絶望するがいい」

明日菜？

「これで、終わりだ」

タカミチ

「それは、どうかな…!!」

タカミチは無音拳を放とうとするが…。

明日菜？

「おーっと、攻撃していいのかな？」

タカミチ

「…どういう意味だい？」

明日菜？

「私の命とこのアスナとやらの命は私の能力で連結しているのさ！  
つまりお前が私を攻撃すればこの女にも危害が加わる!!」

タカミチ

「なっ!!」

明日菜？

「フフフ、できないだろう？」

さらにこの擬態の肉体がほろびても私は何度でも元の姿に戻ることが出来る!!!

つまり！お前の攻撃は全てこの女にしか届かないのさ!!!」

タカミチ

「くっ……!!」

ケイオス

「…虚勢だとは思いが…そうだという確証はどこにも無い…。」

レオン

「何とかあいつを元の姿に戻せばいいんだろ？」

タカミチ

「ぐ…まあ、そういうこと…になるかな。」

レオン

「だったら…」

タカミチ

「何か…手でもあるの…かい？」

レオン

「……………無い!!」

全員が盛大にこけた。

エヴァ

「何も無いなら喋るな!!」

タイガ

「とりあえずあいつを攻撃してみるとかどうや？」

レオン

「それは意味無いだろ！！」

ユリ

「殴って気絶させるとか！！？」

レオン

「お前が殴ったらあいつが死ぬ！！」

ユリ

「な…あなたはあたしを何だと思ってるのよ！？」

ルキア

「タライを落としてみる！」

レオン

「何が解決するんだよ！それで！！」

カイル

「とりあえず逃げて事を穏便に済ませた方が」

レオン

「あいつが今更俺らを逃がすと思うか！？」

クララ

「あの、それより髭タカミチのこの方の回復が先決じゃ！？」

レオン

「それもそうだな！クララ、カイル！頼んだ！」

ケイオス

「はあ……。あいつを魔法で元に戻したらどうだ？」

レオン

「え、そんな魔法あったっけ？」

ケイオス

「お前が提出を迫られてたレポート……。」

あれは『真実の姿に戻す魔法・ツアイベル』だ。」

レオン

「あゝなんか聞いたことあるな……。」

ケイオス

「それで奴を元の姿に戻すんだ。」

レオン

「使い方しらねーよ!？」

ケイオス

「他に誰か使い方を知ってる奴はいないのか!？」

レオン

「セリオスと……クロニカだな」

ケイオス

「今いないじゃないか!!」

ユウ

「あ…でもボク大体なら分かるよ」

ケイオス

「それは本当か？」

ユウ

「あ…うん。まず…鏡が必要だよ。」

レオン

「鏡…持ってない。」

ケイオス

「鏡として使えれば何でもいいんだな？」

ユウ

「うん…。たとえば、水面とかガラスとか…。」

ケイオス

「よし、レオン。その剣をよこせ。」

ユウ、この剣を使ってその魔法を使え!!」

明日菜？

「そうはさせるか!!まずはそのガキから片付けてくれる!!」

ユウ

「わああっ!?!」

ガンツ！！！！！！！！

明日菜？

「ぐあ！？」

今、何が起こったのかというところ…。

？<sup>キマイラ</sup>明日菜がユウに斬りかかる。

？ユウが反射的に杖を振りかざす。

？<sup>キマイラ</sup>明日菜にタライが落ちる。

てゆうーか、反射神経？

明日菜？

「うぐぐ…おのれ！！貴様ア！！」

レオン

「てか普通に攻撃魔法使えよ」

エヴァ

「いや、あの女の体はマジックキャンセルで魔法を受け付けない。」

レオン

「ってことはナイス判断だったのか」

ユウ

「単なる偶然なんだけどね…。」

ケイオス

「そんな事より！！今だ、ツァイベルを使え！」

ユウ

「う、うん！」

鏡よ、真実を見抜く力を宿し かの者の真実を映し出せ！！」

ユウが手にした剣が光り輝き、キマイラを照らし出す。

明日菜？

「ぐあ…何だ…この光は…！？」

光が晴れたときには、元の2つ頭の魔獣の姿でキマイラが立っていた。

side out

side セト

「ここが…麻帆良か…」

ラカンが言っていた水晶とは何だ…？

まさか、そのまま水晶が浮いているわけでもあるまい…？

すると、俺の目の前をキラキラした石が通り抜けた。

セト「ああ、そのまま水晶なのか…」

何はともあれ俺はその水晶を破壊した。

すると、力が少し戻ってくるのを感じた。

セト」ほほじ…。」

これをあと99個か…。  
簡単だ。

第11話 堕ちた神獣（後書き）

今回、セリフだらけ。

にしても、結構人が来てるのに誰一人としてコメントとかくれないのは

何故なんだ！

第12話 格の違い（前書き）

なんか遅くなりました。すみません。

## 第12話 格の違い

side 最深部

キマイラは元の姿に戻り、そこに佇んでいた。

タカミチ

「これで、ようやく普通に叩けるね」

クララとカイルにより回復したタカミチが戦線に復帰する。  
しかし、キマイラはあくまで余裕だった。

キマイラ

「グルルル…（クククク…）」

タカミチ

「何がおかしい？また擬態でもする気かい？」

キマイラ

「グルル、グルアアア？（何か、勘違いしているようだな？）」

レオン

「何…？」

キマイラ

「グルルルアアアアア…。（私はまだ、何も力を使っていない…。）」

キマイラ

「グルルオオオアア！！（見せてやろう、私の力を！！）」  
そういうと、キマイラ翼はを広げ空高く舞い上がった。  
そして、キマイラの口から炎が溢れ出す…。

キマイラ

「グルルルルオオオアア！！（地獄の業火！！）」

キマイラの口から物凄い業火が一同に襲い掛かる。

エヴァ

「氷盾！！！」

エヴァの魔法でキマイラの炎が跳ね返…らなかった。  
圧倒的な力で氷盾を粉碎する。

しかしエヴァはそれを回避し、再び攻撃に打って出る。

エヴァ

「凍て付く氷枢！！！」

エヴァの魔法でキマイラは氷柱に閉じ込められた。  
しかし…。

ピシッ…ピシピシ…

パキイイイイイイン！！

氷は跡形も無く割れ、キマイラが外に出てくる。

キマイラ

「グルルル…！（ムダだ…！！）」

ケイオス

「サンダーstorm!」

キマイラ

「グルルルオオオアア! (二度も同じ手は食わん!)」

キマイラ

「グルルルオオ… (来れ雷精、風の精!

雷を纏いて吹きすさべ南洋の風!

雷の暴風!!!)」

タカミチ

「な…何故あの魔法を!？」

その直後、巨大な旋風と稲妻が一同を襲った。

「『『『うわあああ!?!』』』」

旋風が晴れたとき、すでに一同はボロボロだった。

キマイラ

「グルルル! (神との格の違いが分かったか…? そろそろ死ぬがいい!!)」

すると、ヤケになったレオンが驚きの発言をした。

レオン

「タカミチ…この森焼いていいか?」

タカミチ

「は？」

レオン

「この森と共にあいつを焼く。」

タカミチ

「…そもそもあいつに炎が効くか？」

レオン

「わかんねえけど…熱を加えると大抵の物は柔らかくなるだろ？っだから…」

タカミチ

「あいつも柔らかくなる…と？」

レオン

「ああ。」

タカミチ

「そんなわけあるか！！そもそも森を燃やすな！！」

レオン

「やってみねえと分からん！バーニングソード！！」

レオンは木を斬りつけた。

気から炎が燃え広がり、一気に森が焼けてくる。

タカミチ

「バカかお前は！？」

レオン

「ああ、バカだ！けどな！バカにはバカにしかない力を持つてるもんだぜ！！」

炎が森に燃え広がる…。

そしてキマイラはその巨体ゆえに焼け木に阻まれ脱出できずにいた。

キマイラ

「グルルルウオオオアア（ぐあああああ！！）」

その光景を遠くから眺めているものがいた。

空中に翼で滞空し、燃える森を見つめるもの。

それは…。

セト

「何事だ…？」

まあいい。あの騒動で勝手に水晶が壊れてくれれば儲けものだ…。」

時を同じくして、リミッターを8つ解除したセト。

セトは今、半端融合ダイク・フォルムにより翼が生えている。

セト

「あと2つ破壊したら、こんな所とは早々にオサラバだ…。」

セトは翼を翻し、飛んでいった。

side out

side 村

ラカン

「何…だと…!？」

村長

「で、ですが私はそんなことこれっぽっちも思っておりません！  
何しろ、ラカン殿はあんな怪我を…。」

ラカン

「…そいつの、名前は…？」

村長

「ええと…奴は自分を死神と…。  
あと、茶髪のメガネで危険な目つきをしてました…。」

ラカン

「茶髪…メガネ…!!！」

村長

「何か、心当たりでも？」

ラカン

「……………セト……………!!！」

side out

第12話 格の違い（後書き）

キマイラ

「フフフ、後書きに出てみたぞ！」

ノントルマス・M

「あ、そう。でも君次回で死ぬよ、ていうか俺の名前はサド・マゾではなく、

ノントルマスパー・マスターですんで勘違いしないように。」

キマイラ

「マスターって何だよ？他のがいんの？」

ノントルマス・M

「良くぞ聞いてくれた！そう、いるのだよ……ってか。もうこんな時間？では、さよなら！！」

キマイラ

「待て、うちむやにするな！！」

第13話 キマイラの最後(前書き)

焼け落ちる森…さて、どうなる？

### 第13話 キマイラの最後

side 森

レオンが放った火により、森が焼け落ちていく。

キマイラ

「グルルル…!!（おのれ…!!）」

キマイラはその巨体を焼け木に阻まれ、脱出できずにいた。

キマイラ

「グルルル！（擬態…!!）」

しーーーーん…。

キマイラ

「グルル!?（な、何!?）」

キマイラ

（しまった!!あれは一度しか使えないのか…!!）  
自分の能力くらい覚えとけよ

キマイラは燃え続ける。

キマイラ

「グオオオオオオオオ!!」

キマイラ

「グルルオオ…（私の…私の体が…ああ…！！！！）」

キマイラ

「ガアアアアアアアアアアアア！！！！」

その断末魔の叫びと共に

6匹の漆黒のカラスが

森からどこかへと飛んでいった…。

side out

side セト

セト

「フン…意外とあっけなかったな…。」

それより、あの連中は誰だ…？

セト

「…フン。まあいい。いまはリミッターの解除に専念すべきだな…。」

「

あと2つか…さて、何処にあることやら…。」

side out

side 寮長室

ユリ

「狭い!!」

レオン

「しょうがねえだろ!!そもそも人数が多すぎるんだ!!」

キマイラとの戦いからはや2日…。

一堂は全員、女子寮長室に集まっていた。

ケイオス

「で…。まずは状況を整理するぞ。」

突然謎の世界に飛ばされたから、状況整理するのは当然。

むしろ、レオンとユウが今まで何も感じなかったのが不思議なくらいである。

レオン

「俺はだな…こっちに来る前は、サツキ先生に言われたレポートをやってたな。」

ケイオス

「…で、それから?」

レオン

「そうそう!突然目の前に黒い稲妻が走って…それから…  
……………覚えてねえ。」

ユリ

「あ、あたしも黒い稲妻見たよ!こっ、バチバチッ!…とね。」

ケイオス

「黒い稲妻…？そういえば俺もそうだな。皆そうなのか？」

皆が小さく頷いた。

ケイオス

（黒い稲妻…？一体何なんだ…。）

ルキア

「それより、この部屋狭いよ！」

レオン

「だーから、仕方ねえだろ！」

その後、女子は退室。

ちなみに女子は生徒として部屋を貰ってます。

タイガ

「それより…女子達は部屋を貰えるから良いとして、ワイらはどうなんや？」

レオン

「ん？」

タイガ

「イヤ、ホラ。今、男は5人いるやろ？5人では狭くないか？」

ケイオス

「かといってどうする？男が女子寮の部屋に行くと言っても言っのか？」

レオン

「あ、それだ。」

ケイオス

「は？」

レオン

「この中で誰か、女子室に行け。コレじゃ狭すぎるだろ？」

タイガ

「…ほんならレオン、頑張つてや。」

ケイオス

「何とか女子達に話を通せ。」

カイル

「皆のために行ってくれるんですよね？」

レオン

「はあ！？何言ってるの！？何で俺に確定してるの！？？」

タイガ

「いや、だってほら…なあ？」

カイル

「言いだしっぺはレオン君ですからね？」

レオン

「いやいや…この中ではユウが適任「タライ！」「ぐはッ…！！！」

ユウ

「見た目で決め付けられても困るよ…。」

ユウがレオンに杖を向ける。

レオン

「いてて…うん…じゃあどうすんだよ？」

カイル

「くじ引きとかどうでしょう？」

タイガ

「まあ…それくらいしかないか…？」

レオン

「じゃあ決まり！今作ってくるから待ってるよー！！！」

レオンは怪しい笑みを浮かべた。

side out

### 第13話 キマイラの最後（後書き）

分からない人のために説明！

q m aの皆は対象の相手にタライを降らすことができます。

第14話 地獄の部屋割りくじ引き(前書き)

今回はギャグメインですね。  
最後以外。

## 第14話 地獄の部屋割りくじ引き

side 寮長室

レオン

「と、言うわけで作ってきました！」

レオンの手には5枚の細長い紙が。

レオン

「これを一人づつ引いて、端が赤く塗られた奴を引いた人が女子寮行き！」

引く順番はじゃんけんで決めてくれ！」

ジャンケンの結果。

1、カイル

2、ユウ

3、ケイオス

4、タイガ

余りがレオン…と言う結果に。

カイル

「まずは僕ですね…っと。

…よかった。赤ではないようです。」

ユウ

「次は僕だね…。」

よかったあ！赤じゃなかった。」

ケイオス

「あー、次は俺か…。」

「…赤ではないな、一安心だ。」

タイガ

「次はワイか…。2分の1やからな…。」

グイツ

タイガ

「ん…？レオン、お前握力強いぞ。ひきにくいんやが。」

レオン

「じゃあもう片方を引け。」

タイガ

「ほほう、じゃあこれが赤じゃないんやな？じゃあこれを引くわ。」

レオン

「諦めろ！」

タイガ

「だが断る！」

ビリッ！

ケイオス

「ああ…。そら破れるのは当然だな。」

タイガ

「往生際が悪いでレオン…お前が女子寮行きなんは確定やろが！」

レオン

「認めん！俺は断じて認めんぞ！」

「やっぱりクジでは不公平だ！」

ケイオス

「いーや、諦めろレオン。」

レオン

「いーや！ここはタカミチに判断してもらおう！」

そして数分後。

レオン

「連れてきたぞ！」

タカミチ

「君は僕の事を便利屋か何かと勘違いしてないかい？」

レオン

「お前が部屋を手配できないからこんな事になったんだろ？」

タカミチ

「（ギクリ）…で、僕に何をしろと？」

レオン

「この中で誰が女子寮にふさわしいと思う？」

タカミチ

「そりゃ…見た目的にはユウく『ギロリ』レオン君だな(汗)」

レオン

「ちょ、おかしくね？何で見た目的に俺なの？」

タカミチ

「ああ…いや…(察してくれよ…)」

ケイオス

「だとさ。タカミチがいうんなら仕方がないな？レオン。」

レオン

「うわあああ嫌だあああ！！ヤッパリタカミチもダメだ。もつと他の…」

ブルルルルルルル  
ブルルルルルルル

レオン

「ん？俺の携帯…。」

レオン

「はい、もしもし。」

『レオン！ようやく通じたな…お前今何処にいる！？』

レオン

「え、お前その声…セリオスか！？」

タカミチ以外「『『『ええっ!?』『』『』」

レオン

「おお〜! やっぱお前もこっち来てたのか!？」

セリオス

『それより、お前今何処にいる!？』

レオン

「え…麻帆良学園…お前、どうしたんだ? そんなに焦って…」

セリオス

『麻帆良学園…分かったそこにいるんだな!？ 詳しい話についてはから説明する、

とにかくそっちに向かうから動くなよ!？』

レオン

「おい、ちょっと!？ お前こそ何処にいるんだ!？」

他の皆もいるのか? もしもし! 『ガチャツ』切れた…。」

ツ…ツ…。

一気に静まった部屋に電話の音だけが空しく響いていた…。

side out

side セト

パキイン!

セト

「これで9個…あと1つか。」

あと1つ解放すれば、こんな所にいる必要はない。

とつとと全て解放し、奴を殺す。

さて、あと1つは何処にある…。

s i d e o u t

第14話 地獄の部屋割りくじ引き（後書き）

ノントルマス・M「ちなみにレオン達もケータイくらい持ってます。  
世界観おかしいと言わないの〜てか言わせな〜」ry

**第15話 急展開！ ラプラス接近！？（前書き）**

今回はシリアスメインですね。

ところで今、学校で試験期間中なんですけどねえ。

こんなの書いてて良いのかなあ。

第15話 急展開！ ラプラス接近！？

side とある場所の山中

セリオス

「ようやく…山から…抜けられたか…はあはあ…。」

時は数日前にさかのぼる…。

レオン達と同様に黒い稲妻と共に気を失ったセリオス。どうやらレオン達とは別に、よく分からない場所の山に寝ていた。さらにセリオスは遭難し、仲間とも合流できずにいた。

空腹やのどの渴きは、氷の魔法で出した氷を食べて解消（魔法ってすごいね〜！）。

しかし、ホウキも無い今、移動は歩いてするしかない。足が棒になり、山の6合目辺りで休息を取っていたときの事…。

セリオス

「こんなものしか食うものが無いとはな…（ポリポリ）」

「あら…セリオスさん!？」

耳に聞き覚えのある声が聞こえてくる。シャロンだった。

シャロン

「貴方、こんな所で一体何を…。」

セリオス

「君もこんな所に来ていたのか：此処がどこだかわかるか？」

シャロン

「貴方はわかりますの？」

セリオス

「サツパリだ。」

シャロン

「…私もですわ。」

知り合いに合えた喜びと、やはり現在地が分からないという失望感が2人を襲った。

…と、その時。

ぐるるるるる…。

セリオス

「…食うか？」

シャロン

「／／／／…。頂きますわ、って氷ですよ！？」

セリオス

「食うものと言えばこれくらいだ。というか君はこれまで何を食べてたんだ？」

シャロン

「そこら辺の動物とか、草を焼いて食べていましたけど？」

セリオス

「…（汗）随分と遅いな。」

シャロン

「…そんなことを言われても嬉しくありませんわ。」

キヤアアア！

セリオス

「っ！何事だ！？」

シャロン

「あっちからですわ！行ってみましょう！」

二人は森の奥へと走っていった。

s i d e o u t

s i d e 森の奥

「見つけたぞ…セラ！！」

森の奥では巨大な魔物とセラの姿。

その魔物とは…。

魔神ラプラス。

セラは運よく他の仲間とも合流していたのだが、それでもラプラスには勝てない。

そこでサンダースが策を思いつき、ラプラスの前に立った。

サンダース

「セラ殿、此処は我が時間を稼ごう！貴殿達は早々に他の仲間を探し、

この山から脱出するのだ！！」

セラ

「わ、わかりました…行きましよう皆さん！」

アロエ

「でも、サンダースさんは！？」

サンダース

「心配など無用！」

ラプラス

「ふん、貴様などに用はない…。とつとつご退場願おうか…！！」

サンダースは皆が逃げたのを確認した。

サンダース

「行くぞ…！！」

s i d e o u t

s i d e セリオス&シャロン

セリオスは、誰かが逃げてくるのを見た。  
アカデミーの制服だった。

セリオス

「何事だ!?!」

セラ

「セリオスさん、今すぐ逃げてください!」

シャロン

「どういふことですか!?!」

セラ

「ここにはいきません!ラプラスが追ってきます!」

セリオス

「ラプラス…だと!?!」

セラ

「早く!?!」

セリオスとシャロンも、山から逃げることになった。

そして、物語は冒頭へと…。

side out

side サンダース

サンダース

「はあ…はあ…。」

ラプラス

「ふん、この結果は既に見えていた。」

あの連中が逃げてから数刻。  
…そろそろだろう。

サンダース

「さらばだ!!」

サンダースはミサイルに乗って飛び立った。

ラプラス

「すべて、お見通しだ!!」

サンダース

「な、何っ!?!」

ラプラスも飛び立ち、サンダースを追いかける。

s i d e o u t

s i d e 街

セリオス

「携帯は、通じるか…!?!」

セリオスは、レオンの携帯に電話をかける。

プルルルル。

プルルルル。

「おかけの電話は、電波が遠いため…。」

セリオス

「くそっ!?!」

諦めずにセリオスはもう一度電話をかける。

プルルルル。

プルルルル。

セリオス

「頼む、かかってくれ…!」

ガチャ

レオン

『はい、もしもし。』

セリオス

「レオン!ようやく通じたな…お前今何処にいる!?!」

レオン

『え、お前その声…セリオスか!?!』

レオン

『おお~!やっぱりお前もこっち来てたのか!?!』

セリオス

「それより、お前今何処にいる!?!」

レオン

『え…麻帆良学園…お前、どうしたんだ？そんなに焦って…』

セリオス

「麻帆良学園…分かったそこにいるんだな！？詳しい話については説明する、

とにかくそっちに向かうから動くなよ！？」

レオン

『おい、ちょっと！？お前こそ何処にいるんだ！？他の皆もいるのか？もしもし！』

レオンの話を聞く事無く、セリオスは電話を切った。

ゴオオオオオオオオ！

サンダーズのミサイルの音が聞こえたからだ。

上を見上げると、サンダーズの姿と共に、ラプラスの姿も確認できた。

セリオス

「くっ…。はたして着くまで生きていられるか…。」

すると、ラプラスの目の前に突然若い男が現れた。  
セトである。

ラプラス

「セト！？どけっ！」

セト

「ラプラス、今はその時ではない…まだ少し待て。」

ラプラス

「奴らに、復讐を…!!」

セト

「いくぞ。」

セトはラプラスと共にどこかへとワープした…。

セリオス

「な、何だ…!?!」

シャロン

「それより、レオンさんのいるその…マホラとか言う場所に行くのが先決じゃなくて?」

セリオス

「それもそうか…。」

一同は再び走り出した。

**第15話 急展開！ ラプラス接近！？（後書き）**

ちなみに、数学とか英語の授業中はいつも、  
小説のアイデアを練ってます。

ユニークアクセス2061人記念(前書き)

ユニークアクセス2061人記念!!

## ユニークアクセス2061人記念

ノントルマSマスター

「ユニークアクセス2061人記念!!」

セト

「素直に2000人突破と言え。」

ノントルマSマスター

「…とはいえ、別に企画とかは無いですよ、サーセンwww」

セト

「殺すぞ」

ノントルマSマスター

「マジですいません。」

セト

「何か考える、さもなければ2000人突破記念は俺がお前を拷問する内容になるぞ」

ノントルマSマスター

「やめて下さい、ホントそれはやめてください。

じゃあこの作品の紹介でもしようかな。」

…というわけでこの作品の紹介でもしようと思えます。

何か企画があればいいんですけどねえ〜思いつかないですよ。

今回のアクセス記念とかでやって欲しい企画とかあれば募集します。

で、この作品の紹介ですが。

この作品は今連載中の、第1期に加えて、

原作介入の第2期。

再びセトが活躍する第3期。

もはや登場人物しかネギまとかqmaじゃない第4期激闘編。

第4期で終わろうと思ってます。

もう少し詳しく言うと、第3期は麻帆良学園祭です。

第4期は、セトが全時空を巻き込む大乱戦を繰り広げる内容。

全時空ということ、何か出して欲しいキャラクターとかいたら募集します。

たとえば、

「rebornのキャラを出して欲しいー！」とか、

「ブリーチを出さんかい！」とか。

ちなみに、自分が連載している小説のキャラクターとかでも可です。募集したキャラクターはなるべく見せ場を作ります。

期限は、第4期が始まるまで。

多くのキャラクター、お待ちしています！！

…ちなみにですが、戦闘モノじゃないキャラクターとかはご遠慮いただきますよ。

たとえば、クレヨンしんちゃんやらあたしんちゃんやらサザエさん等。

## ユニークアクセス2061人記念（後書き）

現在募集中の事

- ・次回アクセス記念でやってほしい企画
- ・第4期で出して欲しいキャラクター（自分の小説なども可）

多くの応募、お待ちしております！！

第16話 全員集合(前書き)

予想外にも投稿できてしまった。  
いや、良い事なんだけれども。  
明日、中間試験です…。

## 第16話 全員集合

side 麻帆良学園

カイル

「はい。直りましたよレオン君。」

レオン

「おおお！サンキュカイル！！」

そういつてカイルがレオンに渡したのは、レオンの剣。  
キマイラとの闘いでボロボロに刃こぼれしていたのだった。  
しかもその剣でユウが魔法を使ったせいでさらに衝撃が加わり、  
遂には折れてしまったのである。

で、レオンが材料を集め（森で）、カイルが練成魔法で再生したの  
である。

レオン

「おお！直ってる直ってる！…せいっ！！」

と、レオンが剣を振ったその時。

バキンッ！！

フォンフォンフォンフォン…。

ザクッ。

ブシュー…。

場に暫しの沈黙が走る。

何が起こったかというと、レオンの剣が突然折れ、遠くに飛んで行き。

偶然通りがかったタイガの脳天にザクツ。赤い液体がブシュー…というわけである。

レオン

「うおおおおおタイガあああ!!」

カイル

「…やはり「あれ」を欠かした事が問題なんでしょうか…」

レオン

「そ、そんな事よりタイガだ! おおいしい、タイガー!」

side out

side 同じく麻帆良

セリオス

「…ここか?」

セリオス達はようやく麻帆良学園に到着。

セリオス達が此処までたどり着けた理由としては、見知らぬ者がラプラスとともに消えたおかげだろう。

ともかく、セリオス達は学園内に入りレオン達を呼んだ。

『レオン先生!、レオン先生!。事務室にてお客様がお待ちです。』

しかし、そのアナウンスがレオンに聞こえることは無かった。

何故なら、レオンは外にいたからである。

カイル

「…やはり「青い石」は重要なんですよ…アレを欠かしちゃ…」

レオン

「だって！そんなもの幾ら探しても見つかんねえんだもん！！」

外に倒れていたタイガを、中に運び込み保健室においてきた。それだけでも一苦労である。

と、その時。

『レオン先生ー、レオン先生ー。お客様がお待ちです。』

「至急」事務室までお越しく下さい』

2回目のアナウンス。

カイル

「…先生？ああ、そういえばレオン君、副担任になったとか…。」

レオン

「ああ、そだよ。仕事は全然してないけどな。」

立ち話をしている間に、更に時間は流れ…。

『レオン先生！レオン先生！お客様がお待ちです！』

「大至急」事務室までお越しく下さい！！』

レオン

「やっべ、忘れてた…！」

レオンは事務室に走っていった。

side out

side 事務室

セリオス

「客を10分も待たせるとはどういうことだ？レオンせ・ん・せい。」

セリオスが意地悪く言う。

レオン

「う、うるせーな。こっちだって色々あんだよ。」

セリオス

「フン。」

レオン

「いま、鼻で笑ったな!？」

シャロン

「あーもー、話が進みませんわ!！」

セリオス

「おっとそうだった。」

レオン。この世界について何かつかめたか？」

レオン

「ん、ああ。まず、マジックアカデミーが無いこと。それと、地上は俺らのいた世界と地理が同じなようだぜ。」

セリオス

「そしてこの世界にもラプラスがやってきている。もしかしたら僕らが見知らぬ世界にいるのも、奴のせいかもしれない。」

レオン

「はあ！？あいつは消滅したんじゃないのか!？」

セリオス

「さあな。今は何も分からない…。だが、とりあえず仲間にも再会できたというだけで—安心だと思わないか？  
それと、レオン。ここにはお前しかいないのか？」

レオン

「いや…カイル、タイガ、ユウ、ルキア、クララ、ユリ、ヤンヤン、ライラ、ケイオス…  
お前らを合わせると全員だな。」

サンダース

「つまり、ひとまずは全員集合ということだな？」

レオン

「ああ、そうだな。全員集合だ!」

side out

第16話 全員集合（後書き）

なんかグダグダに終わってしまった。  
何かすいません。

## q m a キヤラ確定設定（前書き）

まだ16話しか本編は無いのに合計としては  
22部もあります。

## q m a キャラ確定設定

レオン

2 - A 副担任の1人。

といても仕事をせずユウに押し付けている。

無鉄砲な性格。

武装解除系のイベントには必ず居合わせる運のいい奴。

武器の剣はキマイラとの戦闘後、ちよくちよく折れる。

ネギと一緒にいることが多いが、フラグ体質ではないためネギのフラグを奪えない。

ユウ

2 - A 副担任のもう1人。

仕事をレオンに押し付けられ、不満が溜まっている。

中性的な顔立ちが悩み。

武装解除系のイベントには絶対に居合わせない。

人の話を本当に効いているのか疑問。

魔法を使うが殆ど攻撃魔法を知らない。

といいつつ、レオンへのお仕置きときは強力な攻撃魔法を使う。

必殺技はエターナルライト。

セリオス

副担任が無理なので2 - A に生徒として入った。

原作イベントにはほぼ関わらないどころか、キャラにもあまり関わらない。

武器は剣。

氷の魔法が得意。

カイル

セリオス同様生徒として入った。

面倒見のいい性格のためか原作キャラに相談を持ちかけられることが多い？

魔法を使うが、おもに補助と回復だけ。

ラスク

生徒として（ry

2 - Aの皆に好かれている（見た目的に）

武器は持たず魔法を使う。攻撃が主。

サンダース

生徒。

生徒からは先生と思われがち。

「幾多の経験がそう思わせる」とかいつてるが、マラリヤに「単に老け顔なだけ」と切り捨てられた。

武器は素手。

タイガ

生徒。

レオンと若干キャラがかぶる。  
女子生徒に好かれない。

武器は素手。

(前回の紹介のときは大剣だったがパワーバランスがおかしいと指摘されたので)

クロニカ

生徒ではなく、どっかをふらふらしてることが多い。  
しかしイベントにはしっかり介入してきたりする。

武器は素手。

素手が多いのは仕方ない。

ケイオス

生徒ではなく、図書館島にすることが多い。  
オリジナルイベントにはほぼ入っている(ラプラス関連)

武器は魔法。

かなり魔法が上手い。

ルキア

生徒。

イベントに入ることは少ない。

魔法使い。

杖も使うが基本素手。

シャロン

生徒。

雪広あやかとキャラがかぶりまくる。

魔法使い。 基本素手。

クララ

生徒。

のどかとキャラがかぶる。 しかしメガネ。

カイルと同じく回復系魔法使い。

アロエ

生徒。

ラスク、ユウとだいたい同じ年。

見た目的にアーニヤと似てる。

回復系魔法使い。

マラリヤ

生徒だがよく欠席する。 しかし病気とかではなくズル休み。  
怪しげな薬を作り、誰かに飲ませようとする。

攻撃系魔法使い。

ユリ

生徒。

割とイベントに入りやすい。

魔法を使わず素手。

ヤンヤン

生徒だが、良く欠席し、自室で内職をしている。

ゆえに殆どイベントに関わらない。

ぶっちゃけ作者がこの子の事をあまり知らない。

魔法を使わず素手。

ライラ

生徒。

クロニカの姉。やはりイベントには関わらない。

攻撃回復魔法使い。

セラ

生徒。

ケイオスの弟子。ケイオスと同じく極端なほどの甘党。

セラが作る「濃縮クリームドリンク（うる覚え）」は舌がしびれるほど甘いらしいが、本人とケイオスは普通に飲んでい

回復系魔法使い。

## q m a キャラ確定設定（後書き）

現在、以下のアイデアを募集しています。

- ・アクセス記念でやって欲しい企画
- （ q m a キャラでもネギまキャラでもセトでも良いです ）
- ・第4期で出して欲しいキャラクター
- （ あなたの小説からでも可。ほのぼの系はNG。 ）

第17話 セトとラプラス(前書き)

おっとセトのターン。

## 第17話 セトとラプラス

side セト

セト

「残りの水晶はどこにある…。」

俺は相変わらず麻帆良の上空を飛んでいた。

当然、水晶を探しての事だ。

水晶の気配は、学校内に感じる…。しかし畏という可能性もあり得る。なので、校内の探索は躊躇していたが…。だがとつとこんな所とはオサラバしたいのも事実だ。

すると、遠くからラプラスの魔力を感じた。

俺は翼で近づき、様子を伺った。

すると、ラプラスは異世界からの来訪者達を追いかけていた。

その時、俺の頭にある考えがよぎった。

まずい…。！ラプラスを止めなければ。

俺はすぐさまラプラスに近づいた。

ラプラス

「セト！？どけっ！」

セト

「ラプラス、今はその時ではない…。まだ少し待て。」

ラプラス

「奴らに、復讐を…。！！」

セト

「いくぞ。」

俺はひとまず、奴と共に影国に入った。

ラプラス

「貴様…何故邪魔をした!？」

セト

「まあ聞け…説明してやる。」

セト

「まず、お前が奴らを追いかけていたな。

奴らは麻帆良学園に向かつてる。これは知ってたか？」

ラプラス

「…いいや…。」

セト

「続けるぞ、そしてお前は奴らを始末する前に奴らを麻帆良に行かせてしまう。」

そして麻帆良には奴らの仲間が勢ぞろいしている…これも知らなかっただろっ?」

ラプラス

「…ああ。」

セト

「麻帆良にて勢ぞろいしたとき、お前は前回と同じよう倒され、今度こそ」

消滅する…しかし、被害はそれだけでは収まらない。

お前が死ぬということは、時空移動も解け、俺はお前の世界に送り返される。

俺は時空を切り開く事が出来るが、リミッターをされているから今は無理…。

しかもリミッターはこっちの世界にある。つまり…。

お前は消滅したうえ、俺もあの世界に永遠に彷徨い続ける…。  
わかったか？どれだけ重大かが。」

ラプラス

「あ、ああ。」

俺は更に強い口調でこう続けた。

セト

「いいか！お前は軽率な行動を取らず、暫く此処に居ろ。  
俺が再び時空移動が可能になるまでな！」

ラプラス

「何だと！？それでは…」

セト

「いいな！！これ以上無駄に時間を使うというならば、  
貴様を殺して『時空権』を奪うぞ！」

ラプラス

「……………！」

奴もこれ以上は言ってこないようだな。

俺は影国から去ろうとした。

ラプラス

「待て。お前は何故『時空権』の存在まで知っている？  
お前は何者だ？」

セト

「…俺はもともと、此処じゃない時空の住民だったのさ…。  
俺はそこで、平和に暮らすつもりだったが…。」

ラプラス

「だったが？」

セト

「……………。」

俺は何も言わずに影国から出て行った。

俺は何も思い出さたくない…。あの村の事も、「リリース」の事も…。

s i d e o u t

## 第17話 セトとラプラス（後書き）

今回最後にセトが言っていたのは、

『セト＝イングリシア（another story）のお話。  
まだ連載してないけどストーリーはちゃんと考えてるんだからね！

## 10000PV突破記念(前書き)

ところで、セトの事を読者の方はどう思っているかアンケート。参考までに。どっちにしるストーリーは変わらないけど。

- 1、本編の邪魔
- 2、ウザい
- 3、パワーバランスが崩れる
- 4、何なんだあんな
- 5、いいぞもつとやれ
- 6、カッコいい
- 7、チート上等

以上の選択肢または「8、その他」でコメントとかしてみてください。

セト

「何なんだ最初の4つは」



だってホントに何も無いんだもん！

セト

「じゃあ書くなよ！」

！閃いた。

セト

「？」

『セト＝イングリシア } another t story }』  
の予告でもしようかな。  
予告といっても映画予告みたいな感じに。

というわけで、予告が始まります！

「私の影が、動いたり、喋ったりすればなあ……。」

……………。

「そしたら、お友達になれるのに……。」

俺の凍った心を溶かしたのは、小さな一人の少女だった……。

「あなた、だれ？」

「俺は、セト……。…お前は？」

「私、リリース。よろしくね！」

「……………ああ、よろしく……。…」

平和な時が、ずっと続けばよかった……。

「……………リリース？」

しかし……………。

「リリース！…おいつ！…リリース！！！」

氷が解けた心は、リリースの死に耐えられなかった……。

そして……………。

「許さない……………村の連中、1匹残らず皆殺しにしてやる……………！！！」

俺の心は、凍った心から狂った心へと変化した。

ハイ！予告は以上です！

セトのこの話はセトの存在を語るうえで非常に大切です。

故に、本編でたまに回想とかが出てきます。

この話を連載したとき、「ああ、このシーンかあ」など思っていた  
できれば光栄です。

…とまあお話はこれで終了！！

皆さんこれからも『Quiz Magic Academy x 魔

法先生ネギま！』時の魔神の復活』を

よろしく願います！！

1000PV突破記念(後書き)

そろそろちゃんと本編更新しないと怒られそう。

第18話 最後の水晶（前書き）

セト、遂に始動！！

## 第18話 最後の水晶

side セト

ラプラスを影国に押し込んで1日目。

ラプラスの事もあり、いつまでも足踏みしているわけには行かない。俺は意を決し、校内に踏み込むことにした。

例え罷だろうと強行突破するまで。

とはいえ、あまり派手に行動するわけには行かない…。

セト

「すみません。高畑先生に用事があるのですが…。」

「えーと…どちら様ですか？」

セト

「あー…俺は…ジョン・スミスです。」

高畑先生を呼んでくれませんか？」

「はい、わかりました。今、アナウンスするのでちょっとお待ちください…。」

タカミチを呼んだ意味は特に無い。

この学校に潜伏していることが分かっているからだ。

こうして、客に成りすましてたやすく進入成功だ。

side out

side レオン自室

セリオス

「水晶？」

レオン

「そう！何か拾った。」

レオンは手に透き通った色の水晶を持っていた。  
森で偶然拾ったものだという。

ふくしゅウ《2》の最後の方に出てきたアレである。

セリオス

「よくそんな怪しいもの拾ったな…。」

レオン

「いやあ、キレイだったからさ」

と、その時。

ドアが破壊された。

セリオス

「なッ！？」

ドアの向こうから現れたのは、セリオスは初対面ではないあの男。  
ラプラスを制止し、どこかへと消えたあの男。

セト

「水晶は…どこだ…。」

side out

side タカミチ

僕はアナウンスに呼び出され、事務室に来ていた。

タカミチ

「あれ…誰もいない。」

僕が来ている間にどこかへ行ってしまったのか。  
どちらにせよ、暫く待てば来るだろう…。

side out

side エヴァ

エヴァ

「何だこれ…。」

私が目にしたのは、…家だった。  
学校の敷地内に、突如謎の家が。  
しかも上から降ってきたかのように、辺りの地面がへこんでいた。  
中に入ると、まさに普通の家だった。  
誰かが生活していてもおかしくない。家具も一式揃っている。

となると、家の持ち主はそろそろ帰ってくるのではないだろうか。  
帰ってきたところを、不法侵入で一網打尽にしてくれる。

私は、暫く待つことにした。

その時、不審な魔力を感じた。

side out

side レオン自室

レオン

「な…、何なんだ!？」

セト

「その水晶は俺のものだ…とつとと返せ。」

レオン

「はあ?」

セト

「その水晶を壊せ。」

レオン

「何言つてんだあんた?」

セト

「いいから…壊せ!!」

するとセトは腕を振り上げた。

セリオスはその腕に物凄い魔力が溜まっていることがわかった。

セリオス

「レオン、伏せろ!!」

レオン

「へっ!？」

セトの手からどす黒い魔力の塊が生まれる。

そしてその塊は球体になる。  
そして、セトはその球体を投げつけた。

レオンとセリオスの背後から、物凄い風圧と爆発が起こる。  
そして、ガラスが粉々に割れた。

レオン

「な……!!」

セト

「その水晶を渡せ。もしくは壊せ。」

レオン

「く……。」

セト

「渡さないなら……お前ごと壊すまでだ……！」

エヴァ

「ほほう。」

突如、割れた窓ガラスからエヴァが顔を出す。

エヴァ

「お前があの家を乗り捨てた……侵入者だな？」

セト

「家？ああ……ここまでに乗ってきたアレか。」

エヴァ

「やはり侵入者が…引っ立ててやる」

セト

「無駄だ。」

エヴァ

「氷の精霊17頭…」

集い来たりて敵を切り裂け。

魔法の射手連弾 氷の17矢！」

エヴァが魔法を発動する。

氷柱がセトに向かって全て命中した。

…かに思われた。

エヴァ

「何…!？」

氷柱は全て空中で静止しているのだ。

そして、氷柱は全て床に落ちる。

セト

「無駄だといっている。」

しかし…やはり畏だったか…？

他の水晶を壊してからの方がよさそうだな…。」

エヴァ

「何をぶつぶつ言っている。」

セト

「もうここにいる必要は無い…。」

すると、セトは翼を広げ、割れたガラスから飛び去った。

エヴァ

「逃がすか！」

エヴァもセトを追い空へと飛び立った。

それをレオンとセリオスは啞然としながら見送った。

レオン

「な、何だったんだ…。」

セリオス

「さあな…だがその水晶、やばい代物のようだ…。」

レオン

「つと、そうだ！タカミチにも知らせとこう！」

レオンはタカミチのいる事務室に走った。

side out

side 麻帆良上空

セト

「ち…。しつこいやつめ。」

エヴァ

「氷神の戦鎚！！」

巨大な氷の塊がセトに向かう。

セト

「ハハツ、何だこれ？」

無駄に決まってるだろ！」

セトは馬鹿にしたような笑みを浮かべ、ダーク・フォルム半端融合で腕を悪魔化する。  
そして、氷の塊をパンチで粉々に粉砕した。

エヴァ

「く……。一体何者だ……？」

s i d e o u t

**第18話 最後の水晶（後書き）**

第4期でキャラ募集中！

詳しくは活動報告を参照！

第19話 死闘!! 影の魔王と真祖の吸血鬼(前書き)

セトvsエヴァ、勃発!

## 第19話 死闘!! 影の魔王と真祖の吸血鬼

side タカミチ

僕は相変わらず応接室で客を待っていた。  
すると、レオン君が走ってきた。

レオン

「おい！タカミチ！！」

タカミチ

「何事だい？」

レオン

「侵入者だ！今、エヴァと戦ってる。」

タカミチ

「エヴァと？…その侵入者とやらは君たちの仲間かい？」

レオン

「いや、ぜんぜん違う…。メガネをしてて、茶髪の…」

タカミチ

「メガネ…茶髪…。いや、まさか…。」

わかった。僕も行こう。エヴァはどこだい？」

僕の脳裏に浮かんだのは、セトの姿。

昔、ナギがそこらへんで拾ったという魔力拘束具をつけて異時空に  
送り飛ばしたあの男…。

まさか、生きているはずはない。

僕は一抹の不安を抱えながら、外に出た。

タカミチ

「ところで、エヴァと侵入者はどこにいるんだい？」

レオン

「空だよ。」

タカミチ

「空!？」

レオン

「ほら、上だ!」

上を見上げると、腕が悪魔のようになり、翼が生えている謎の男とエヴァの姿。

謎の男? いや、違う…。僕はあいつを知っている…。

あいつは…セトだ…。

side out

side 麻帆良上空

戦況は変わらず。

相変わらずエヴァの繰り出す攻撃をセトは軽く避け続ける。

エヴァが魔法の射手を使えば、すべて空中で静止した後落下し。氷爆を使っても、高スピードの飛行で避けられる。

エヴァ

「くっ…。なぜ戦わん？」

セト

「お前ごとき相手にならないからさ。」

エヴァ

「貴様！！」

エヴァはセトと視線を合わせ、セトを幻想空間へと引きずり込んだ。

レオン

「あれ…？なんか2人とも止まったぞ？」

タカミチ

「幻想空間に引きずり込んだんだろう。」

レオン

「あのメガネは誰なんだ？」

タカミチ

「セト。セト…イングリシア。」

「完全なる世界」を潰した男。

世間的にはナギ達が潰したとされているがそうじゃない。

「完全なる世界」はやつが潰したんだ…。」

レオン

「完全なる世界？何だそれ？」

タカミチ

「…いや、なんでもない。」

要するに奴は、半端じゃなく強い…ということぞ。」

レオン

「セト、ねえ…。」

タカミチ

( 僕も赤き翼のメンバーだからな…。  
おそらく、僕もやつこの復讐の対象になつてるんだろ…。  
奴の毒牙が、僕に迫る日も、遠くないかもしれない…。 )

レオン

「どうした？なんか考え事か？」

タカミチ

「…なんでもない。」

side out

side 幻想空間

エヴァが作り出した幻想空間は「崖」だった。

セト

「何だここは？」

エヴァ

「お前の墓場だ…！私を愚弄した罪を償ってもらつぞ…！」

セト

「お前を殺せば、ここから出られるか？」

エヴァ

「さあな、やってみるか？」

セト

「…こんなところで遊んでいる暇はないからな。行くぞ…！」

エヴァ

「来い…！」

side out

**第19話 死闘!! 影の魔王と真祖の吸血鬼(後書き)**

次回、最終回!!

セトとエヴァの決着は…。

ちなみに、第4期のアイデアは随時募集中です。

詳しくは、活動報告を参照。

第1期 最終話 落下（前書き）

最終話ですよ！奥さん！！

第1期 最終話 落下

side エヴァ

私は奴を幻想空間に引きずり込み、戦いを挑んだ。  
ところが、だ。

いかなる攻撃も奴には通じなかった。

エヴァ

「氷結 武装解除！」

セト

「無駄だ。」

そういうと奴は体中に炎を纏った。

氷は跡形もなく解けた。

炎が消えても、奴は傷ひとつなく、服の焦げすらない。

エヴァ

「…お前、何者だ？」

セト

「俺は影だ。全てを否定する影。」

エヴァ

「ふん…。凍てつく氷棺！！」

私の魔法により奴が氷漬けになる。

…が。

ピシッ。

氷にひびが入り、そして…。

ガッシャアアアン！

粉々に割れた。

セト

「俺にはいかなる攻撃も通用しない…。

そろそろお前と遊んでいる暇もなくなってきたな。」

そういうと奴の腕が黒い波動に包まれ、波動が消えたとき…。

奴の腕が人間のものではなくなっていた。

表すとすれば、悪魔だろう。

どす黒く、まさに奴のイメージに合った装備だ。

セト

「行くぞ。」

そういうと奴に黒い翼が生え、奴はその場から消えた。

…と、その時。

エヴァ

「ぐはぁっ！？」

突然背中に衝撃が走り、吹き飛ばされた。

な…何事だ…。

エヴァ

「くっ…。」

セト

「ハハハ、無様だな。」

「こんなもの、俺の実力の1割にも満たないというのに…。」

エヴァ

「なん…だと…？どういう意味だ？」

セト

「今の俺はナギによりリミッターをつけられているのさ…。」

それを一刻も早く解放し、奴を殺さねばならない。」

エヴァ

「ナギを…殺すだと？奴は…死んだはず…。」

セト

「ああ、表向きではな。だが、奴はまだ生きている。

感じるのさ…奴の生命の波動をな。それを消すことこそが、俺の目的…。」

エヴァ

「……………。やらせんぞ…！」

私は断罪の剣を取り出した。

セト

「面白い玩具だな。」

それで、俺を攻撃しようか？」

エヴァ

「これは今までのようにかわすことはできんぞ……。」

セト

「だから……全部無駄だって言ってるだろ。」

エヴァ

「何？ ……！！！」

体が、動かない。

奴の手から黒い糸が出ている。

しかし、糸は私にはかすりもしていない。

糸は、私の影に突き刺さっているだけだ……。

しかし、なぜか体がピクリとも動かない。

セト

「エクスキューションソード  
断罪の剣」

エヴァ

「！！！」

セト

「お前自身の技で消えるがいい……さらばだ。」

私は幻想空間を解除し、自分の意識を体に戻した。

セト

「？ 消えた……。」

side out

side セト

俺は奴の技をコピーし、剣を振り下ろしたはずだった。  
奴が、消えていたのだ。

セト

「…この世界から抜け出す方法もあるようだな。」

俺は精神を統一し、この世界を見渡した。

セト

「……………」。

side out

side 麻帆良

エヴァが幻想世界から帰り、動き出した。

タカミチ

「帰ったかい、エヴァ。奴は…。」

エヴァ

「まだ、幻想世界にいる…。」

レオン

「この隙に、そいつの体を壊しとけばいいんじゃないね？」

エヴァ

「少し気が引けるが、そうするか…タカミチ、レオン、手伝え。」

タカミチ

「本気かい？」

レオン

「俺、冗談で言ったんだけど…。」

エヴァ

「こいつの体をどっかから落とそう。」

数分後…。

一同は崖に来ていた。

タカミチ

「ここから落ちればひとたまりもないだろうが…本気でやるのかい？」

エヴァ

「…こいつは、ナギを殺そうとしている。殺しておいたほうがいい…。」

…と、その時。

セト

「…。」

一同

「!?!」

セト

「ここは…そうか、現実世界か…。」

エヴァ

「ば、馬鹿な!! 幻想空間から抜け出すなど…!!」

セト

「現実世界ということは、今度こそお前を殺せるわけだな？」

エヴァ

「くっ…断罪の剣!!」

セト

「来たれ、破滅の魔剣!!」  
アディシオンダースソード

セトは不気味な装飾が施された剣を取り出した。

ギューンッ!!

ガキンッ!!

ガキッ…。

エヴァ

「…………!!」

エヴァの断罪の剣が折れた。

セト

「斬れば斬るほど切れ味が増す破滅の魔剣…。  
貴様の剣によりより切れ味が増すだろう…。」

セトはエヴァに魔剣を突きつける。

セト

「もう終わりか？」

エヴァ

「フフ、まだ最後の手段がある…。  
最後の最後の手段がな…。」

セト

「……？」

そういうとエヴァはセトに体当たりした。

タカミチ&レオン

「「！？」」

体当たりにより、セトとエヴァは崖から落ちていった。  
2人は猛スピードで落ちてゆく…。

セト

「おいおい何のマネだ…？これじゃお前も死ぬただけだぜ？」

エヴァ

「残念だが私は飛べるんでな…。」

セト

「だったら俺も……。！！！！翼が……開かない!？」

セトの背中が凍結している。

エヴァの技である。

エヴァ

「ハハハッ！落ちて行けセト……地獄までな!!！」

セト

「笑わせるな……この程度で俺が死ぬとも思ってるのか?」

エヴァ

「負け惜しみは結構だ。」

セト

「お前にはそう聞こえるか……。」

エヴァはマントを広げ、飛んだ。

エヴァの落下が止まり、エヴァが崖から戻ってくる。

タカミチ

「奴は!？」

エヴァ

「死んだだろう……この高さから落ちたんだからな。」

タカミチ

「もう……終わったのか?」

エヴァ

「ああ、全てな…。」

3人は学校に帰っていった…。

だが、これは始まりでしかないことに気づくものは誰もいなかった…。

第1期 終わり

第1期 最終話 落下（後書き）

これはただの始まりでしかない…。

## 第2期 予告（前書き）

例によって伝わりにくい予告です。

そういえば、第2期のオープニングとか考えてみました。

OPテーマ

「ハッピー マテリアル」

EDテーマ

「Soul to Soul」

みたいな感じ。

## 第2期 予告

セトとの戦いから数日…ネギがイギリスから赴任してくる。

親を探すというネギの目的に共感を覚えるレオン。

原作介入が始まる…。

そして…。

「彼ら」が帰ってくる…。

???

『6つに別れし、私の体よ、私の魂の元に再び集結せよ…。』

???

「あんなものでこの俺が死ぬとも思っただのか？」

そして、セトの毒牙はついに紅き翼にも及ぶ…。

セト

「さあ、最後のカードを引け…ナギ。」

ナギ

「くっ…。」

そしてネギ達は、麻帆良学園祭の出し物、武道大会に出場するが…。

タカミチ

「何で…こいつが出てるんだ!？」

エヴァ

「知らん…奴の考えることなんか分からないからな。」

波乱の第2期、スタート!!

第2期 予告(後書き)

映画の予告CMとか作ってる人すごいよね!!

第2期 第1話 ネギ赴任（前書き）

今回ユウのキャラ崩壊が激しいです。

というがこの小説のユウはあんな感じですけど。

第2期 第1話 ネギ赴任

side 麻帆良学園

カイル

「青い石、見つかりましたか？」

カイルはレオンに話しかけた。

レオン

「見つからねえ…。そんな物無い…。」

カイル

「それじゃ、この剣は直りませんね。」

レオン

「ぬう…！」

~~~~~

レオン

「あ、メールだ。なにになに…。」

『職員室に来てくれ』短っ！メール本文短っ！！』

カイル

「では、いつてらっしやーい。」

レオン

「ちっ…。」

レオンは職員室に向かった。

side out

side 職員室

レオン

「ういーっす。何事？ってかなんで俺を呼んだの？」

学園長

「君が2-Aの副担任だからじゃ。」

レオン

「え？じゃあユウは？」

タカミチ

「呼んでるのに、来ない…。」

部屋にもいないようだ。」

レオン

「何だあいつは…。」

その時、やかましい足音が聞こえた。

バンツ！

明日菜

「学園長先生、一体どうということなんですか！」

レオン

「うお、びびったー。」

ネギが明日菜に持たれてる。怪力だな。ユリほどじゃないけど。

時間が飛ぶ。

だって原作どおりなんだもん。

レオン

「そーいや、ネギはなんで教師になつたんだ？」

ネギ

「僕は、父さんを探しているんです。それで…。」

レオン

「え、お前も親父を探してるのか？」

ネギ

「えー!?じゃあ、レオンさんも!？」

レオン

「ああ、大賢者だってことしか情報が無いからな…。雲をつかむような人探した。」

ネギ

「そつなんですか…お互い、がんばりましょう!…!」

レオン

「おう！！」

と、その時！！

レオン

「っ！！！」

ネギ

「どうしたんですか？」

レオン

「ネギ…お前は先に教室に入ってきてくれ…後で行く。」

ネギ

「…？わかりました、ではあとで。」

レオンは曲がり角を曲がった。

そして。

曲がり角のところにユウがいた。

ユウ

「よく分かったね。」

レオン

「お前…何やってる？」

ユウ

「面倒事に巻き込まれるのは嫌なので。」

レオン

「お前：副担任だろ？何でネギといないんだ！！」

ユウ

「この後面倒なことが起こるので。」

レオン

「いいから来いよ！！！」

ユウ

「面倒な書類仕事が溜まってるのでまた今度……。」

そう言い残し、ユウは転移魔法でどっかに行ってしまった。

レオン

「あーちくしょうあの野郎！！」

まだあいつネギと顔合わせてないだろ！？」

レオンはしかたなく2-Aに向かった。

そのころ、ユウは。

ユウ

「……。終わる気がしない。」

机に高々と積み上げられた書類と格闘中だった。  
逃げ口上ではなかったようだ。

side out

side レオン

2 - Aに入るとネギが授業中だった。

やばい、遅れた。

ま、いいや、授業が終わるまで待つか…。

時は流れ、授業終了。

ネギが出てきた。

ネギ

「あ！レオンさん！どこ行ってたんですか？

クラスの皆さんにレオンさんのこと紹介してないですよ！！」

レオン

「あ、ああ、悪い。もう1人の副担任ともめてた。」

ネギ

「もう1人の…。そういえばその人とは会ってないですけど、どんな人ですか？」

レオン

「ん…。ネギと大体同じくらいの年齢だな。」

ネギ

「へえ…ぜひ会ってみたいです、その人は今どこにいますか？」

レオン

「多分部屋じゃないかな？」

というわけで副担任室の前。  
なんか知らんが部屋の中から物凄い殺気を感じるのは気のせいだろ  
うか。  
怖ええよ。何なんだよ。

レオン

「ネギ…ここは危険だからまず俺から入るぞ。」

ネギ

「え？は、はい…。」

俺は恐る恐るドアをあけた…。  
次の瞬間！！

レオン

「ひいつ!?!」

紙が飛んできた。  
恐ろしいスピードで。  
紙の角が壁に刺さって、めり込んでいる。  
ちよつと俺の顔も切れた。

そして部屋の奥から殺気の主が現れた。

ユウ

「人に仕事を押し付けて何処に行ってたのかな？」

レオン

「ひつ…ど、どこって、2-Aだよ。ネギが来たから…。」

ユウ

「それはそうとまずやることがあるんじゃないかな!？」

怖ええええ!!

その笑顔やめてくれ!! 逆に怖い!!

ユウ

「さあ…早く…。」

レオン

「は、はいいい!!」

大急ぎで逃げるように部屋に入り、仕事を始めた。

ネギ

「な、何かあったんですか？」

ユウ

「いや、割といつものことだよ。レオンさんが仕事をサボるから…。」

「

ネギ

「そ、そうなんですか…?」

あ、そういえば改めましてはじめまして。

2-Aの担任のネギ・スプリングフィールドといいます。」

ユウ

「あ、そっか。君がネギ君か。よろしくね!」

ネギ

「は、はい！よろしくお願いします！」

ちなみにこの日ネギは思った。

もう1人の副担任の人には絶対に逆らわないほうがいい、と。

s i d e o u t

第2期 第1話 ネギ赴任（後書き）

久々の投稿なのにこんなですいません。

絶賛スランプ中です。

ていうか今はリボーンのほうに力を入れているので。

第2話 吸血鬼騒動(前書き)

ヤバイ、超グダグダ。

早く第4期が書きたい…。

## 第2話 吸血鬼騒動

「27番、宮崎のどか…悪いが、お前の血をいただきよう！」

のどか

「え？キヤアアアッ！」

ネギ

「ま、待てー！」

原作通り進むお話。

しかし、そうでもなかった。

エヴァが飛び立ち、それを追うネギ。

ここまでは原作通りだが…。

ユウ

(……………。)

木の陰に隠れ、その騒動を見ていたものが1人、いたとするとどうだろう。

まあ明日菜も見てたが。

ユウはそのまま誰にも気づかれず去っていった。

数日後。

カモが学園にやってきました。

原作通り、茶々丸に奇襲を仕掛けるネギ、明日菜、カモ。

ネギが魔法の射手を撃とうとしているその時。  
近くでこんな騒動が起きていた。

ユウ

「書類仕事が100枚くらい溜まってるとるんだけど。」

レオン

「へえ。(だから怖いって…!)」

ユウ

「書類仕事はとりあえずやっておくから、その分別の仕事をしてほしいんだ。」

レオン

「別の仕事?(ホッ)」

ユウ

「僕が合図を出したら、この公園をホウキで突っ切ってほしいんだけど、できる?」

レオン

「ん?ああ、簡単だけど…それに何の意味が…。」

ユウは茂みの辺りから公園を覗く。

今まさに、ネギが魔法の射手を撃とうとしている。

ユウ

「はい、いつてらっしやーい!」

レオン

「え？ああ、合図か。」

レオンはホウキにまたがり、公園を飛んだ。  
それと同時にネギの魔法が放たれた！！

レオン

「ぐはあっ！！」

ネギ

「えっ！？」

カモ

「な、なんだあ！？」

ユウ

（ナイス盾！！）

全てユウの陰謀だった。  
何が起きたかというと。

？ネギが魔法を放つ。

？ネギの魔法は全て飛んできたレオンに当たる。

？その隙に茶々丸が逃げ出す。

ユウ

「奇襲はダメだね、奇襲は。」

レオンがネギとか明日菜とかカモに詰め寄られている。  
何で茶々丸をかばった、とか、お前もエヴァの仲間か、とか。

ユウ

「別に攻められるようなことはしてないと思っけどね。」

面倒なことになる前に退散しよう。うん。

ちなみに、何故ユウが奇襲作戦を知っていたのか。

話は数日前にさかのぼる…。

吸血鬼騒動の後、カモがこの学園に来たことを知ったユウは、ネギの部屋へ行き、カモを見ようとした。

その時、ちょうど奇襲作戦の事を話していて、それで奇襲作戦の事を知ったのである。

単純な理由。

s i d e o u t

s i d e ? ? ?

グオオオオオオオオ

グオオオオオオオオ

森に黒いカラスが6匹、木に止まっている。

何者かの鳴き声を聞きつけたかのように。

グオオオオオオオオ

グオオオオオオオオ

『6つに分かれし我が体よ、今一度我が魂の元に集え…。』

s  
i  
d  
e  
  
o  
u  
t

## 第2話 吸血鬼騒動（後書き）

第4期で出してほしいキャラクターを募集中。

詳しくは活動報告の「募集中」を参照。

予想外にキャラクターが集まらない。

お願いだから何か案を出してください。（切実）

## 番外編 第4期について

第4期で書こうと思ってるのは、ズバリセトとの決戦です。  
ハイパーネタバレタイム行きますか。  
ネタバレが嫌いな人は見ないほうがいいですけどね。

まず、セトは第3期にてネギまの時空から消滅。  
しかし、全ての時空の中央に位置する『時空の狭間』に再生されま  
す。

そして、全てにケリをつけようとするセトは、時空の狭間から  
全時空の「影」を吸収し、究極の力を得ます。  
そのセトの紹介でもしよかな、と。

セト（究極形態）

顔が髑髏になり、声がダークエレメントみたくなる。（ダーククロ  
ニクルの）

大幅に巨大化し、両腕が黒々とした骨になる。

顔が髑髏で、腕が常に出ている以外はカービィの夢の泉デラックス  
に出てくる  
ナイトメアそっくり。

能力

THE TEMPEST

巨大な青白い嵐を発生させる。  
巻き込まれると死ぬ。

THE FLAME

所々から何兆度もの炎が噴き上がる。  
当然だがあたると死ぬ。

THE BLIZZARD

何百もの氷の粒を飛ばす。  
あたるとかなりダメージ。

THE LIGHTNING

青白い雷の球体から四方に何兆ボルトもの電撃を放つ。  
当然あたると死ぬ。

THE DARKNESS

ブラックホールを出現させる。  
吸い込まれると死ぬ。

THE SHADOW

黒い細長い槍を大量に飛ばす。  
当たると時空のアルゴリズムに飲み込まれる。(要するに死ぬ)

THE CHAOS

虹色の球体が大爆発する。

影殺

腕で攻撃するだけ。  
でも威力は半端無い。

神殺

マントの下から黒い光の粒を飛ばす。  
当たると体が闇に侵食される。

破滅の福音

体から波動を四方に放つ。

あまりにもチート過ぎるこの能力。

それに対抗しようとするキマイラは、多くの時空から一定以上の戦闘能力を持つ、

『時空の勇者』達を集め、セトとの最終決戦に臨むのだった…。

みたいな感じの第4期。

それで、時空の勇者としてキャラクターを募集しているわけですが、全然来ませんね。

今のところ2件しか来てませんよ。

バトルものなら何でも良いです。

無論、自分の小説からでもありです。

できる限りたくさんのお応募をお待ちしています!!

番外編 第4期について（後書き）

『切実に』 『けなげに』 あなたの応募を待っています。

セト

「『適当に』 『馬鹿みたいに』 の間違いだろう。」

『切実に』 『けなげに』 だ！！

第3話 マラリヤ見参？（前書き）

カオス。つまんない。

### 第3話 マラリヤ見参？

side レオン

エヴァが風邪を引いたらしい。

ネギの事とかあるので行かないが、  
せめてユウだけでも行ってほしい。  
が、まずありえないか。

side out

side エヴァ

茶々丸

「風邪ですね。」

エヴァ

「ふん、こんなもの…!!」

茶々丸

「無理せず安静にしておいてください、副担任の人を呼んでおきました。」

エヴァ

「副担任？ああ…あいつらか…。」

ネギの副担任になったとか言う身元不明の奴ら。  
待てよ？2人居たけどどっちが来るんだ？

ガチャッ

チャイムも何も鳴らさず!?

エヴァ

「誰だ？」

マラリヤ

「ふ ふ…ふ…。」

エヴァ

「…誰だ？」

マラリヤ

「あら、覚えてくれてないのね…悲しいわ…くすん。」

エヴァ

「だから、誰だと聞いているだろう!！」

マラリヤ

「安静にしないと『死ぬ』わよ…風邪だと思って甘く見ない事。私はマラリヤ。風邪薬を作りに来たわ、頼まれてないけど。」

エヴァ

「副担任の連中が来るんじゃないのか？」

マラリヤ

「副担任？さあ、知らないわ。そのうち来るかもね。」

もう突っ込まない事にした。  
面倒くさい。

マラリヤ

「まずはこれから試してみましよう。」

そうとうと奴は紫色の液体の入った試験管を取り出した。  
試験管から怪しい煙が部屋中に充満した。  
液体もやけに泡立ってるし。

エヴァ

「誰がこんなもの飲むかあっ!!！」

試験管を取り上げ、床に叩き付けようとしたその瞬間。

マラリヤ

「下手に衝撃を加えると爆発するわよ。」

エヴァ

「はわあっ!?!？」

マラリヤ

「冗談よ。」

エヴァ

「こゝ、こいつ!?!！」

試験管を割った。

マラリヤ



「…まだ何も言ってないわよ。」

ようやく帰った。

ピンポーン。

また誰か来たな。

ガチャツ（ドアを開ける音）

ボフンツ（えヴぁが投げた枕があたった音。）

ユウ

「…………痛い。」

エヴァ

「帰れ。」

ユウ

「ええ〜…今来たところなんだけど…。」

エヴァ

「いいから帰れ、静かに寝かせろ。」

ユウ

「k」

エヴァ

「かえれっ!!」

ユウ

「ち。」

舌打ちされた。

まあ、ともかくようやく帰ったようだな。  
早く茶々丸帰ってこないかな。

ピンポーン。

もういい。

鍵かけよう。

ガチャ。

ネギ

『ちよ、何で閉めるんですかぁー！？  
僕ですよー！！お見舞いに来ましたぁー！！』

もういいから寝かせてくれ…。

最初のあいつのせいでも疲れた。

しかしこの後茶々丸と一緒にネギが入ってきて、  
結局果たし状を突きつけられたとか。

s i d e o u t

s i d e ? ? ? ?

?????

「いい加減行動を起こすか…。」

奴もい妻も薄暗い中では鬱憤が溜まるだらうつからな。

## 更新停止のお知らせ

この度は、まことに勝手ながら当小説の更新を停止したいと思います。

作者の勝手な都合でこんな終わり方になってしまったことをお詫び申し上げます。

更新停止、というか次回更新を無期延期にしたいと思います。

とまあ堅苦しい文面で書いてしまいましたが、ぶっちゃけ、ネタが無いわけではないんです。

更新無期延期の理由は、はっきり言って書く気がなくなったからです。

だって、もう片方のリポーン小説を見て御覧なさい。

総合評価ポイントの違いを！！

そりゃ〜書く気もなくなると思いませんか？

それと第4期はもしよければリポーンのほうに移そうかなと。

それと、無期延期に対する反対が多数と認めた場合、続きますがまあそれは無いでしょう。

では、みなさんまた別な小説で。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0905/>

---

Quiz Magic Academy × 魔法先生ネギま ~時の魔神の復活~

2011年9月11日13時00分発行